



## 第 18 号

令和 7 年 (2025)

3 月 12 日 発行

### 巻頭挨拶 P3

- ⚽ 緒方 徹 (昭 49 卒 会長) : 2025 年・再生の年に!!
- ⚽ 神谷 佳典 (平 7 卒 副代表幹事) : 事業部設立から法人化への歩み
- ⚽ 戦記 : 令和 6 年度 (2024) シーズン

### リーグ戦を観戦して P8

- ⚽ 渡邊 直樹 (令 6 卒) : OB の立場から見える景色
- ⚽ 近岡 頌 (令 6 卒) : 感想・現役部員へのエール

### 戦いを終えて P14

- ⚽ 山崎 惇樹 (4 年 主将) : 基礎の重要性
- ⚽ 桑島 晴 (4 年) : 環境に恵まれた 4 年間
- ⚽ 齊藤 泰治 (4 年) : 国立での 10 年間
- ⚽ 鈴木 哲平 (4 年) : 体作りの文化
- ⚽ 塚本 悟大 (4 年) : 忘れられない瞬間
- ⚽ 外池 陽丸 (4 年) : 新人 OB として
- ⚽ 原 智也 (4 年) : ひとつの生き物のような組織
- ⚽ 堀内 誠大 (4 年) : INSIDE IKKYO
- ⚽ 森谷 高大 (4 年) : 1 部リーグへの挑戦を振り返って

## 令和7年度シーズンに向けて P27

- 👤 篠田 啓太 (新4年主将) : 再び1部の舞台を目指して
- 👤 川合 楽 (HC) : 「自ら変え、自ら挑む。」
- 👤 八木琳太郎 (新4年) : 残された時間
- 👤 丸茂 琥哲 (新3年) : 再スタート
- 👤 小原 一真 (新2年) : 変化

## 百年史秘話 P34

- 👤 福本 浩 (昭52卒 編集長) : 続・大先輩たちの遺稿

## 海外便り P42

- 👤 佐藤 勇起 (平19卒) : ダラスでの生活
- 👤 阿部 真琴 (平22卒) : サッカーは人を繋ぐ
- 👤 池田 圭吾 ジェイスン (平25卒) : 北緯1度の国 シンガポールより

## 私の学生 LIFE P56

- 👤 五十嵐 日向大 (4年) : 一生の同期
- 👤 大石 俊輔 (4年) : バングラデシュ旅行記
- 👤 加久保 陽太 (4年) : フル馬拉ソン
- 👤 笠置 悠真 (4年) : ア式での最高の経験
- 👤 西田 優希 (4年) : 葛藤の「むぎきり」
- 👤 羽根 洸至 (4年) : こだ寮
- 👤 藪田 尚希 (4年) : 非日常から見た日常
- 👤 渡辺 志音 (4年) : 学年旅行

## 編集後記 P73

- 👤 福本 浩 (昭52卒 編集長) : 春は「温故知新」の季節



## 巻頭挨拶

### 🏆 2025年・再生の年に!!

緒方 徹 (昭49卒) 西松会会長



今年一橋大学ア式蹴球部は関東大学サッカーリーグ東京・神奈川2部での戦いになり、活動がスタートした。新しいリーグ編成となったが、決して気を抜くことのできない戦いが続くことになると思える。2025年は、干支の「乙巳(きのとみ)」。巳は「起こる、始まる、定まる」などの意味とされる。古来、蛇は豊穡神、天候神などとして崇められてきた。脱皮をすることから「復活と再生」を意味するとも。



一橋大学の校章「マーキュリー」は、ローマ神話の商業、学術などの神メルクリウス(英語名マーキュリー、ギリシア神話のヘルメス)の杖を図案化したもの。2匹の蛇が巻き付き、頂には羽ばたく翼が付いている。蛇は英知をあらわし、聡く世界の動きに敏感であることを、また翼は世界に天翔け五大州に雄飛することを意味している。



蛇は、医療や再生、生命力の象徴ともされ、WHOのロゴマークにも蛇が絡みついているカドゥケウスが採用されている。今年の干支は母校とゆかりが深いのだ。

俳句の高浜虚子の年頭の句として有名なものに

「去年今年(こぞことし)貫く棒の如きもの」がある。去年、今年と時間を区切ってみても、自分の中には、一本の芯棒のように曲がらない思いがあると解釈されている。虚子は正岡子規から俳句の伝統を受け継いだ。それを「花鳥諷詠」という言葉で受け止め守っていこうと人生を送ったが、「貫く棒の如きもの」は虚子の俳句への深い信念のことだろう。

今季、一橋大学ア式蹴球部の皆さんは、自分たちの目指す目標に向けて「貫く棒の如きもの」を遺憾なく発揮してほしい。また怪我などすることなく、伸び伸びと人工芝グラウンドで躍動し、チームの再生に挑戦してほしいと強く願っている。

2025年1月11日 OB戦 於小平G



## 🏆 事業部創設から法人設立の歩み

神谷 佳典（平7卒） 副代表幹事



記憶が定かではないですが、現役から“サッカーの活動とは別に、地域コミュニティのための活動をしたい！事業化をしたい！”と聞いたのは、確か2018年か2019年だったと思います。2017年にグラウンド貸与問題で活動休止となり、活動再開すべく地域のボランティアなど地域貢献活動をしていたことが伏線になっています。当時から、地域の清掃活動・お祭りへの参加や、小学生へのサッカー教室の開催を行っていたと思います。2年生か3年生だった藤井俊輔くんが他の体育会を巻き込んで「スポーツコミュニティ」設立を画策していました。  
<http://hit-press.org/news/2065>

同時並行で人工芝プロジェクトが走っていました。

創部100周年に向けて、悲願であった「人工芝化」と現役発の全く新しい取り組みである「事業部」が進んでいたこととなります。わたしは、同期の重満くん（平7卒 法）と人工芝プロジェクトを推進する過程で、幾つかのOB/OG会と接触する機会があり、早稲田大学などの私立大学がスポーツ教室などの地域貢献事業を法人化してやっていることを知っていました。藤井くんからスポーツコミュニティ構想を聞き、是非やるべきだと思い、応援してきました。大学の「いち部活」から、

「地域に愛されるクラブ」への成長・脱皮ですね。応援してきたわたしが持っている夢は、部員が一橋学園駅からグラウンドへ歩いているときや、小平の飲食店に入ったときに、地域の方々から“今週は●●大学戦だよ。先週は負けちゃったけど、今週は頑張ってるね！”とか“○○くんのケガは大丈夫？早く復帰できるといいね！”なーんて会話が交わされることです。

以下は、事業部の活動目的です。

### クラブとまちが共に強くなる

～活気と地元愛にあふれるまちの実現～

01

地域で多くのことを学び、地域に愛着を持ち、将来的には地域を担う人材の輩出環境、治安が整っており、人の結びつきが豊かな誰もが住みやすい街づくり  
人とお金が集まり、人と人がつながり、まちが活気に溢れる基盤の創出

02

### 大学スポーツ`市場`を牽引する

事業部としてのブランドを確立し、大学スポーツ界でのナンバーワンプレゼンスを獲得する  
部員が自信と誇りを持てるクラブへ

03

### “Captains Of Industry”人材の育成

サッカーという好きなことを通じて、最大限学び、成長することができる環境

構想から約5年を経て、活動が多角化してきました。

いまはスポンサーもついて、スクール、ファンクラブ、メディア、パートナーとの協業など、学生自身がアイデアを出し、また収支管理をして「事業」を営んでいます。これらの事業活動をよりスムーズにするために、2025年1月に「一般財団法人くにこだフットボール」を設立しました。こうした活動を通じて、経営感覚を磨くことができるのではないかと思います。

2024年度は約30万円の利益を上げ、戦力強化に使える土台となるまで成長しました。2025年度の利益目標は約100万円です。一橋大学のキャッチフレーズである「[Captains of Industry](#)の育成」に一役買っているのではないかと思います。藤井くんが蒔いた種が事業本部長としての長島くん(令6卒)、宇都宮くん(新4)、岩田くん(新3)に確実に引き継がれ発展してきました。これからも「サッカー」と「事業」を両立し、ユニークなクラブ活動を展開してもらえればと思います。応援しています。

サッカースクール <https://fcikkyo.com/lkkyoFootballAcademy/school>

2023年度の参加者は約100名だったが、2024年度には約150名に増加している



\*毎週金曜日 於小平アメフト場・カフェテリア

低学年：15:00～17:00

中学年：16:00～18:00

高学年：17:00～19:00

\*最初の1時間はカフェテリアで自習・部員が宿題をサポート

→ 希望者には英語・漢字・算数などの自習教材を提供

\*参加費は無料 → 希望者にはア式グッズ練習着5000円を販売

スポンサー

(株)リソー教育 <https://www.riso-kyoikugroup.com>

首都圏を中心に進学塾 TOMAS などの事業を展開

2025年度シーズンよりユニホームの背にロゴが入る



カフェ事業

現在は一橋学園駅近くの茶間茶間という地域のコミュニティスペースで、定期的にトライアル営業を行なっている。将来的には営業日数を増やしていく予定。左の写真は昨年11月に茶間茶間でア式が地域の飲食店の商品を集めて主催したセレクトショップ型 cafe 「学園うまいもんフェスタ」の様子。

<https://www.facebook.com/gakuenchanoma/>



# 令和6年度シーズン

2024

★主将：山崎淳樹 (4) / ヘッドコーチ：川合 楽 (法政大学 4)

★最高学年：五十嵐日向大 / 大石俊輔 / 加久保陽太 / 笠置悠真 / 桑島 晴 / 齊藤泰治 /  
鈴村哲平 / 塚本悟大 / 外池陽丸 / 西田優希 / 羽根洸至 / 原 智也 / 堀内誠大 /  
森谷高太 / 藪田尚希 / 渡辺志音



堀内・鈴村・桑島・塚本・羽根・外池・齊藤・西田・原 藪田 (右上丸枠)  
笠置・大石・加久保・山崎・五十嵐・森谷・渡辺・川合

## 【試合メンバー】

- FW** 笠置 (4)・桑島 (4)・齊藤泰 (4)・八巻 (3)・西野 (3)・三浦 (3)・藤原凌 (2)  
**HB** 五十嵐 (4)・大石 (4)・西田 (4)・森谷 (4)・平賀 (3)・堤 (3)・赤金 (3)・伊崎 (1)  
**BK** 加久保 (4)・外池 (4)・塚本 (4)・羽根 (4)・山崎惇 (4)・安部 (3)・篠田 (3)  
**GK** 岡田 (3)・藤原拓 (2)

【戦績】 東京・神奈川リーグ1部：最下位 2勝3分17敗 → **2部 降格**

対戦順 →	朝鮮	学芸	玉川	上智	成蹊	帝京	日大文理	武蔵	東大	学習院	大東文化
前期	● 3-6	● 0-5	● 2-3	● 1-2	● 0-4	● 0-8	● 0-1	● 2-4	● 0-1	● 1-5	● 1-5
後期	● 2-6	△ 1-1	△ 0-0	△ 0-0	○ 3-1	● 0-3	○ 1-0	● 1-5	● 0-5	● 0-8	● 2-5

## 【東京・神奈川リーグ1部 最終順位表】

順位	大学	勝点	勝	分	負	得点	失点	差
1	帝京	55	17	4	1	62	10	52
2	学芸	49	15	4	3	57	21	36
3	大東文化	46	14	4	4	58	32	26
4	武蔵	33	9	6	7	48	40	8
5	成蹊	32	9	5	8	29	27	2
6	学習院	31	8	7	7	36	27	9
7	朝鮮	28	8	4	10	43	45	-2
8	日大文理	26	7	5	10	31	50	-19
9	玉川	21	4	9	9	24	40	-16
10	東大	19	5	4	13	32	41	-9
11	上智	17	4	5	13	16	45	-29
12	一橋	9	2	3	17	20	-78	-58



## リーグ戦を観戦して

## ⚽ OB の立場から見える景色

渡邊 直樹（令6卒 元主将） 日本政策投資銀行



せっかく執筆のお話をいただいたので、私の思いを書いてみようと思いました。ひとつの意見として参考程度に思っただけであれば幸いです。1部リーグで戦った久々のシーズンで悔しくも最下位、1年での降格となりました。自分も何試合かは現地で観戦しました。やはり応援しているチームが負けて悔しくないわけじゃないですが、それ以上に羨ましいばかりとしか思えませんでした。

自分たちが最高学年の際は2部リーグで優勝こそしましたが、開幕戦から2連敗の経験はとても辛く練習の雰囲気も良くなかった期間があったので、今シーズンの選手たちやスタッフが自分たちの何倍もの苦しい思いをしたに違いないということは、ある程度想像できますが、それ以上に羨ましいという思いが上回っています。ほぼ毎日好きなことに向き合い、好きなことに取り組める環境にあるというのが非常に羨ましいです。たとえ毎週公式戦に負けようともどんなに練習で準備をしても試合では全く活かすことができず悔しい思いをしようとも、好きなことに頭を悩ますことができるというのは最高なことだと思います。



かくいう自分も、卒業するまでは一切そんなことには気がつきませんでした。

しかし、引退する代のブログを読んでみて、環境や周りのせいにして真剣に取り組まなかったというような趣旨のものは正直全く理解ができず、ただただ自分を正当化しているに過ぎないと受け止めています。人の自由なので正直どうでもいいですが、真剣に取り組める環境にあるということが、どれだけ幸せなことなのかは改めて伝えさせていただきます。

今年はまた2部リーグでの戦いになりますが、カテゴリーが1つ下がるとはいえ、試合に勝つのは容易なことではありません。どのような目標を定めているのか分からない中で、外部の立場の者が発言するのは無責任で不適切なものかと思いますが、やはり応援しているチームが試合に勝つのが一番嬉しいですし、優勝や昇格する結果になれば、とても嬉しいです。これからのチームが、どのように戦い、どのように苦しみ、どのように勝つのか、楽しみにしたいと思います。

矛盾していますが、外野からこのような期待をされていたとしても、別に結果がすべてではないという思いもあります。自分たちはサッカーのために大学を選んだわけではなく、プロサッカー選手になるわけでもないし、昇格や降格をしたからといって英雄になるわけでも命を取られるわけでもないです。だからこそたとえ結果が伴わなかったとしても最後まで好きなことに使える時間を有効に活用してもらいたいです。後悔が全くなく終わることは絶対にあり得ませんが、後悔の程度を小さくすることはできるのではないかと思います。

日々の妥協、甘え、遠慮、諦め、その他諸々、何かを感じているのであれば、感じて終わりにするのではなく行動に移すべきです。言葉で伝えるのはためらうかもしれませんが、言葉で伝えることがすべてではありません。思いを持って行動していれば、よっぽど鈍感でない限り、周りの人には伝わります。些細なことまでしっかりと目を向けて真剣に取り組み、そこから今後の人生に繋がる何か大きな学びを得られたのであれば、十分であると思います。色々思う所を書かせていただきましたが、あくまでもひとつの意見に過ぎないということは、最後にもう一度伝えさせていただきます。今年もリーグ戦を楽しみにしております。



## 🏆 感想・現役部員へのエール

近岡 頌<sup>しょう</sup>（令6卒 元学生監督） 東京海上日動火災保険

2024年シーズンは当部にとって我慢の年でありました。高い壁に何度も跳ね返され、プライドが傷つき、その環境を恨んだこともあったでしょう。みんなが置かれていた環境を十分に理解している分、2024年シーズンの取り組みには最大限の敬意を表します。大学を卒業するとサッカーとも距離ができてしまい、試合を見る頻度は現役時と比べかなり少なくなりましたが、A式の試合は思い入れのある選手たちがプレーしていることもあり、現地観戦もリモート観戦もたくさんさせていただきました。新チーム発足当初は、チームの柱というか抛り所のようなものが見つからず、キョロキョロしながらプレーをしている様子が見受けられました。リーグ戦が開幕し、なかなか自信は持てなかったと思いますが、試合を重ねるにつれて覚悟を決め責任感を持ってプレーする選手が増え、たくましくなったのだなと感心するばかりでした。



チームの外から試合を観る中で強く感じるようになったのは、応援部員に加え、保護者やOBOGといったサポーターの数、そして熱量は素晴らしく、選手たちはとても恵まれた環境でプレーしているということです。チーム状況が好転しない中でも、ポジティブに励まし合う姿はとてもエモーショナルでしたし、先制点を奪い期待感のある試合を観せた前期の玉川戦や武蔵戦は、ファイトする選手、それをサポートするスタッフやサポーターの姿を見て、少し涙も流してしまいました。

\*4月21日 第3節 vs 玉川大学 ● 2-3



\*5月25日 第8節 vs 武蔵大学 ● 2-4



私は6月に名古屋に移ってしまった関係で、現地観戦の回数が減ってしまいましたが、幸運にも初勝利を収めた後期の成蹊戦を観戦することができました。1部の強豪チーム相手との試合ということで、今週も難しい試合になるのではないかと思いますながら会場に向かいました。しかし、あの日目の当たりにしたのは、そんな不安を吹き飛ばす素晴らしいパフォーマンスでした。ピッチサイズやコンディションを捉え、ひとつの生き物のようにコンパクトに有機的に動き続ける皆は、とても遅しかった。ボールを中心にコンパクトにプレッシャーをかけ、張り巡らせた網にボールを引っ掛けて奪い、直線的にゴールに向かっていく。能動的にボールを奪うと位置的優位を作った状態でカウンターを開始できる。私の恩師である戸田さんが構築したプレーモデルを体現しているかのようなプレーでした。おそらく4年生にとっては、入部当初に学んだ原点に立ち返ったようなパフォーマンスだったのではないのでしょうか。

サッカーの内容にも少し触れさせてください。

運動量とコンパクトネスに関しては、私がいた頃のチームと比べて、格段に向上していると感じました。身体のサイズは周りのチームに劣っているかもしれませんが、アジリティやクイックネスは他のチームと比較して高く、コンパクトに動くことで局面局面で位置的優位、数的優位を作れていたと思います。また3-4-3という新たにトライしたフォーメーションが機能している場面も多かったと思います。特にスペースに5人（ケースによってはボランチの選手も）飛び出していく攻撃は相手にとっても脅威だったと思います。スペースにアタックするダイナミクスは、私が指揮するチームでは欠けていた要素でしたし、新チームも継承しているように感じられ、とても良い傾向であると感じています。

\*9月1日 第16節 vs 成蹊大学 ○3-1



### 卒業生の皆さん

選手としても人間としても成長し、自立していく姿を見られたことは嬉しい瞬間でした。心身ともに苦しい状態でも仲間を信じ敵に向かい続ける皆の姿に勇気づけられました。最高のフォロワーから最高のリーダーへと引退時にエールを送りましたが、皆がそれぞれのスタイルで「リーダー」になっていたと思います。以前よりたくましく仲間と想いを共有して強大な相手にぶつかる姿はカッコ良く、すごく羨ましかったです。ゲームを見て皆のポテンシャルを実感し、働きかけや起用方法によってはもっといいシーズンを送れたかもしれないと後悔しました。望んでいた結果ではないと思いますが、大きなプレッシャーと戦い、もがき続けた姿は後輩たちに大きな影響を与え、ア式を大きく前に進めたと思います。ア式で得た仲間と自信と共に、新しいステージでも頑張らしましょう。

## 現役部員の皆さん

ずっと可愛らしい後輩だと思っていたス式・セ式が、もう上級生ということで時の流れの速さに驚いています。また同時期に活動できなかったソ式の皆さんもどんどん存在感を増しているように感じられ、とても頼もしく感じています。昨年Bチームの試合を観に行った時の1年生のパフォーマンスには感銘を受けました。私が入部した当時と比べ、都リーグの勢力図は大きく変わっています。指導者にも恵まれ、先進的な取り組みを始めるチームも増え、一橋もその中の1チームとして注目されていたかと思います。しかし、他のチームも追従するように指導体制、チーム環境の整備、選手のリクルーティングを強化することでプレゼンスを高めています。私たちは先行者利益を得ているだけで、今後、様々な方法で力をつけていくチームに遅れをとることも大いにありうると、現役時代から何度か述べさせていただきました。

新チームは2部リーグで戦うことになりますが、今までの2部リーグより高い水準となっていると予想されます。こういった環境で、私たちが競争力を発揮するためにすべきことは何か、首脳陣のみならず、多くの部員が是非考え抜いてみてください。ぜひ取り組んでほしいことは、私たちの「グッドプレー」とは何かということです。私は現役時代、各アクションに対してプロセスを分解し、最終的なアウトプット（ボールを奪われたりボールを奪えたといった最終結果）にとらわれないでプレーを評価し、フィードバックし合うことを強調していました。言い換えると、**認知**（アクション決定前の情報収集）、**決断**（認知したことを基にアクションを決定）、**実行**（ボールを運ぶ、蹴るなど）といったプレーのプロセスを分解し、それぞれを評価して、出来ているところと出来ていないところを明確化するということです。プレーの最終結果だけにとらわれず、柔軟に「グッドプレー」を定義づけることで、積極的なアクションが増えるような環境づくりなども是非考えてみてください。

それと同時に、「サッカーで、部活動で、獲得できることは何か」という問いにも是非向き合ってみてください。新ヘッドコーチのガク（川合 楽）は大学を卒業したばかりで、新チームはほとんど大学生で構成されています。サッカーや部活動に取り組む価値を俯瞰して捉え、咀嚼できている部員は限られているでしょう。そんな同質的集団であるため、自分たちを少し離れたところから俯瞰し、アドバイスをしてくれる人が少なくなります。だからこそ難易度は高くなりますが、少し俯瞰的に自身を捉え、分析し、取り組みに活かしてもらえたらと思っています。

サッカーには、そしてサッカークラブ運営には、無数の方法と答えがある。

「その無数の方法を整理し、課題と施策とその効果を言語化できるようになる」、これを意識して取り組むと、思考力や修正力を身につけられるだろう。「サッカーは多様なスポーツだ。選手やチームの価値の発揮の仕方は様々である」、これを意識して自身の価値発揮に取り組むと、ソサイエティやコミュニティにおける多様性を適切に咀嚼し、他者を尊重しつつ自身の価値を希求できる人材に近づける。（スタッフの皆さんは自身の環境や立場に置き換えて考えてみてください）

少し視点を移して考えてみると、サッカーや部活動に取り組むことの奥深さ、意義深さを見つけれられるのではないのでしょうか。皆さんの貴重な時間を割く部活動が、より価値あるものになっているとOBとしてとても嬉しいです。チームから離れた身にも関わらず長々と失礼いたしました。競技面、事業面でのさまざまな取り組みを心より楽しみにしています。失敗を恐れず、チャレンジを続け、素敵な経験、体験をたくさん積んでください。

\*10月13日 最終節 vs 大東文化大学 ● 2-5



## 戦いを終えて

## 🏆 基礎の重要性

山崎 惇樹<sup>じゅんき</sup>（4年 DF 主将） 千葉・芝浦工業大学柏高



引退してから1か月ほどたって書き上げた卒部ブログ。これを書くために覚えている限りの4年間の記憶を事細かに振り返り、丸1週間ほどかけて推敲を重ねた。だから今更新しく書くことなど何も残っていないと思っていたが、いざ書き始めてみると、大事なことがまだ残っていることに気づいた。

卒部ブログで「シーズン開幕までの積み上げの無さを後悔している」というようなことを書いた。これは間違いなく降格してしまった要因の1つであると考えているが、もう1つ大きな要因があったと今振り返って感じている。それは「基礎を疎かにしてしまったこと」である。開幕戦から1部リーグとの大きな壁を感じた。それはフィジカル面だけでなく、テクニック面も、走力面も、多くの面で自分たちを上回るチームを相手に、つながりを強固にしてチームとしての総合力で相手を上回るサッカーを目指した。4バックで守り切れなから5バックにし、DF背後の広大なスペースを消すために引いて守るという選択をとった。その消極的な選択が相手チームの一方的な展開を加速させ、敗北を重ねる結果を招いてしまった。徐々に積極的に前線からプレッシャーをかけ、2点取られても3点取って勝つサッカーへとシフトしていったが、それでも勝ち点3をつかみ取ることはできなかった。

何が言いたいかというと、

チーム戦術は、あくまでも個人の能力の上に成り立つものであるということだ。

戸田さんの時から「つながりを絶やすな」ということはよく言われてきたし、前年度監督の近岡さんもそれを重視していたと思う。それがア式のカラーだと思し、それがあったから、これまで何度も格上の相手に勝利してきた。だから、それを否定する気は毛頭ない。だが、それが効果を発揮するのはあくまでも個の能力差が埋められる程度の時だけだ。それに気づくことができなかったというより、それから目を背けていた。失点した時に「自分が目の前のFWを止められなかったからだ」と、責任を感じるができなかった。「人数がそろっていなかったから、カバーが間に合っていなかったからだ」と、自分の弱さから目を背けてしまっていた。FWにしてもそうだったと思う。

「自分が単独でも点を取っていたら」ではなく、「チームとしてもっとチャンスを作っていたら、サポートがもっとあれば」に逃げていた。ようやく基礎に目を向け、個々の能力向上を目指した練習を増やしてもらったり自主練習でそれぞれの課題に取り組むようになった結果、少しずつ成果が現れ始めたが、あまりにも遅すぎた。

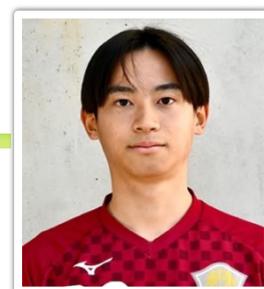
「基礎の重要性」などあらゆる分野で、あらゆるレベルで必ず言われる当たり前のことだ。しかし精神的に追い込まれると、そんな当たり前のことに気づけなくなる。自分の弱さを認めたくなくて当たり前のことから目を背けてしまう。そうやって、当たり前のことを当たり前にやっている人と大きな差ができてしまう。社会人になると学生時代よりも失敗が許されなくなり、「基礎の重要性」が一層増していくだろう。だからこそこの教訓を、4年間の濃密なア式人生の中で得たかけがえのない経験の1つとして、大切にしていきたい。

最後に OB・OG の皆さまのおかげで、4 年間素晴らしい環境でサッカーに打ち込むことができました。今後は自分も OB の一員として、学生がア式でかけがえのない時間を過ごせるように貢献していきたいと考えていますので、引き続きよろしく願いいたします。



## 🏆 環境に恵まれた 4 年間

くわじま せい  
桑島 晴 (4年 MF) 東京・麻布高



はじめに、OBOG の皆様、多大なるご支援、ご声援をいただき誠にありがとうございます。ア式で過ごした 4 年間で振り返ると、OBOG の皆さまのおかげで環境にとっても恵まれていたと感じます。特に、私は 3 年の冬に前十字靭帯を断裂し、9 ヶ月の離脱期間の中で、そのありがたさに改めて気づく場面が何度もありました。

私たちの代は、人工芝のグラウンドが完成した年に入学しました。中高時代は狭い凸凹の土のグラウンドで練習していたため、初めて小平のグラウンドに足を踏み入れた時、その美しさに感動したのを覚えています。怪我をしてプレーができなくなり、リハビリをしながらグラウンドでプレーする皆の姿を見ている時、この環境の価値を改めて考えるようになりました。今の現役部員は当たり前存在しているものとして捉えてしまいがちな人工芝のピッチも、OBOG の皆さまが支えてくださったからこそ存在するものです。そのおかげで、私たちは最高の環境でサッカーに打ち込むことができているのだと強く実感しました。

これからは OB の一員として、次の世代もこの素晴らしい環境でサッカーを続けられるよう、私もできる限り力を尽くしたいと思います。改めまして、これまでのご支援とご声援、本当にありがとうございました。今後ともよろしく願いいたします。



## 🏆 国立での 10 年間

齊藤 泰治<sup>たいじ</sup> (4年MF) 東京・桐朋高

私は桐朋中学校に入学し、その後、国立という街で6年間を過ごしました。桐朋中で学び青春時代を過ごした国立は、私にとって特別な場所です。

ここでの経験は今でも私の人生に大きな影響を与え、まさに私の成長と夢の歩みの原点となりました。

国立での6年間を通じて、私はひとつの大きな夢を抱くようになりました。

それは、名門一橋大学に進学することです。国立キャンパスは、私にとって常に憧れの存在でした。

学問の世界で大きな目標を持ち、しっかりと勉強していれば、きっとその道に進めると信じていました。

しかし、当時はその実現がどれほど困難かを想像することすらできませんでした。結局、私は1年間の浪人生活を経て入学することができました。この1年間は試練の連続でしたが、そのおかげで自分を見つめ直し、さらに強い決意を持って大学生活をスタートすることができたと思います。国立で過ごした時間があったからこそ、この努力の結果が得られたのだと思います。



しかし、国立での10年間を振り返って、私が最も成長できた瞬間は、何よりも一橋大学ア式蹴球部での時間だったと感じています。サッカー部での活動は、単なるスポーツの枠を超えた学びの場でした。練習や試合を通じて仲間たちと協力し、厳しい時間を共に乗り越えていく中で人としても多くの成長を遂げることができました。技術的な向上だけでなく精神的にも強くなれたと思います。サッカーを通じて得た仲間との絆や挫折から立ち直る力は、今後の人生にも大きな影響を与えることでしょう。そして最も幸運だったのは、国立で過ごした学生生活をア式蹴球部で終えられたことです。大学生活の最後の1年をサッカーに捧げることができたのは、私にとって非常に意味深い経験でした。

桐朋中学校から始まり、一橋大学に至るまでの道のりで、多くのことを学び、そして感じました。国立という街は、私にとって、夢を追い求め、成長するための場所だったのです。この経験が、私をひとりの人間としてだけでなく、ひとりの社会人としても成長させてくれたと信じています。これからもその教訓を胸に、前に進んでいきたいと思っています。



## 🏆 体作りの文化

鈴村 哲平<sup>てっぺい</sup> (4年CS) 東京・麻布高



2年次の9月からコーチングスタッフとして入部し、主にスカウティング業務やコンディショニングメニュー（アップ、ランニングメニュー等）を担当していた。ア式には様々な文化がある。試合後に挨拶する文化、公式戦をチーム全員で応援する文化、追いコンの文化等々、小さなものも含めれば無数の不文律が存在するだろう。明確に意義を認識されて残っているものもあれば、何となく代々続いているから継続しているものもある。その逆もまた然りだ。

私は1年次を隣のアメフト部で過ごしたので、節々に両部活の違いを感じる瞬間があった。その最たる例がOB・OGの方々にもご指摘いただいた体作りの文化である。もちろん競技特性の違いを考慮すれば両者のソレが必ず一致するわけではないのだが、それにしても大きな差異があるのは確かだった。前年の西松会新聞で清水一貴さんが食事ラインの文化について記していた。管理・記録の煩わしさ、その一方で終わったことへの寂しさも綴られおり、存在意義には懐疑的な見方が向けられ続けていたようだ。食事ラインを経験した同期も断固としてその制度に反対していた。私もアメフト部時代に経験したことがあるので、その批判は概ね賛同できた。しかしながら、私は半年で10kgの増量に成功したし、先輩方も屈強なフィジカルを有していたことを考えると、あながち無駄なものでもなかったのではないかと感じる。食事ラインから解放された後も、食事の質・量ともに気を配るようになったのは1番の成果だったし、まさにそれを狙っての制度だろう。

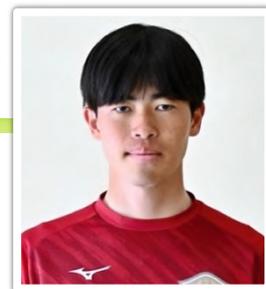
体作りの文化に繋がるのは、何も制度ばかりではないと思う。

各々の習慣が、努力が周囲に伝播し、文化を醸成することもできる。私の引退直前には、自主的にランニングトレーニングをする4年生の数が増えたとし、練習前後にトレーニングルームでウェイトに励む後輩をたくさん見かけるようになった。そうした姿に選手たちが呼応してプラスのサイクルに入れば、より逞しいチームへと成長できるに違いない。そう考えると、やはり努力(食事)を周りに見せることも必要なのかもしれない。



## 🏆 忘れられない瞬間

塚本 悟大 <sup>のりひろ</sup> (4年 DF) 北海道・札幌東高



ア式の4年間の中で、最も印象に残っている映像がある。1年生の秋、リーグ戦も終盤に差し掛かっていた頃だ。戸田監督のラストシーズンでもあり、ア式は総力戦で1試合1試合に臨んでいた。「リーグ戦の舞台」という言葉が多用されていたように、試合に出場する選手たちの間には、とてつもない緊張感が漂っていた。そんな張り詰めた空気を、特に一身に受けていたのが、当時4年の俊足・愛されFW森下 昂さんだ。性格ゆえなのか、リーグ戦では吐き気を催すほどに緊張していたと聞いている。戸田さんから動きが硬くなることを優しく指摘されており、試合前にダンスを踊って(踊らされて?)体をほぐしていた。



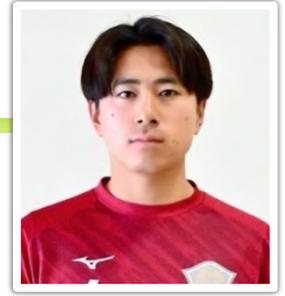
そんな大事なシーズン終盤の、とある1試合。森下さんは先発で、アップからすでにガチガチに気合が入っていた。誰よりも強く声を出し、チームと自分とを鼓舞していた。私はベンチ外としてアップを間近で盛り上げながら、その張り詰めた空気を肌で感じていた。常に全力な森下さんのプレーはもちろん好きだったのでリーグ戦で活躍して欲しいという願いも込め、ちゃんと一生懸命声を掛けていた、はずだった。

気がつくとも横に4年の榎田さんがいて、上がる口角を抑えながら悪魔のささやきをしてきた。それを聞き、さすがに一瞬躊躇した。試合前の緊張感あふれる繊細な時間だったし、また森下さんとは、ほぼ喋ったことがなかったからだ。だが、結局その誘惑には耐えられなかった。そして、振り切った声と顔で言ってしまった。“森下ちゃんとやれ!!”森下さんは、バツと振り向いてこっちを見た。あの困惑の表情が、今でも脳裏に焼きついて離れない。でも、たしか、開始早々にスーパーゴールを決めていました。めでたし。



## サッカー 新人 OB として

とのいけ ひまる  
外池 陽丸 (4年 DF) 東京・暁星高



卒部して早くも4ヶ月。OBになったら、どんな心境でア式を眺めることになるのか、少し楽しみでした。卒部したての頃は、先輩としての多少の心配やリーグ戦の冷めやらぬ熱もあって“来シーズンは全試合観に行く！”と意気込んでいました。実際、逐一情報もチェックしていたのを覚えています。東京都カップは所用のため小平には出向きませんでした。もちろんYouTubeで観戦しました。その前後に八巻など後輩からサッカーについて相談を受け、少し得意げな気持ちで長文返答したことも、今では恥ずかしくなるような記憶です。

そんな熱烈で、半ば老害感もある自分でしたが、年を越えるとサッカーの技量と共に、気持ちも下降気味のようです。サッカーの技量については、年始のOB戦で衰えを痛感させられましたが、気持ちについては、想像以上に自らの「今」が充実し「将来」が楽しみだからだと思います。「今」という点では、やはり国内各所から始まった漫遊で、オーストラリア、韓国と続き、現在はヨーロッパ8カ国の旅路の途中にいます。帰国してからも瀬戸内海周辺や伊勢志摩を巡る予定です。また勉強面でのWord 50ページ、50,000万字近くに迫った渾身の卒業論文を完成させたことも、その要因のひとつかもしれません。そして、来たる社会人生活への興奮と不安が、自らに軸足を置かなければならなくさせている一番の理由だと感じています。

先日、就職先である農林中央金庫での配属が、ついに決まりました。投資部門のひとつで、インフラや社債、PEなど幅広い方面に向かって運用を行う部署です。英語を日常的に使い海外の関係者とのミーティングも多いとのこと、英語の苦手な自分の希望順位では正直なところ高くはありませんでした。しかし、自らの志向やキャリアビジョンを見据えた上では、間違いのない配属であると思っています。それに、人事の方々が自分の話ぶりや将来像の見方を鑑みて決定してくれたのであれば、これが自分にとって良いものなのだと素直に思えます。そして、いざ部署が決まると、否が応でも社会人生活を想像させられます。どのようなことができるかな、どんな困難が待ってるんだろうか、ひとり暮らして楽しそうだな、初任給何に使おうかな、同期や先輩と上手くやっていけるかな、などなど、仕事のことから些細なことまで、ワクワクさせられることばかりです。その一方で、法学部卒でファイナンスや経済、金融について何も知らない自分が、このまま入社しても大丈夫なのか、英語が苦手なのについていけるのか、不安要素も溢れるほどあります。

そんなこんなで、様々なことを考える時間が増え、それに対する勉強や対策をしている内に、徐々にア式のプライオリティが下がり、自分の意識の外に消えかけています。自分の都合ではありますが、それが少し寂しいです。その一方でOB・OGの方々の凄さを改めて痛感させられています。卒部してまだ半年も経ってない自分がこの有様なのに、卒部から何十年も経つ方々が一橋ア式を今でも愛し、多大なるご支援やご声援を届けてくださっていることに、感謝と尊敬を抱きました。そのような先輩方の存在を思うと、自分もいずれ、何年、何十年と経った後に今とは違う形でア式に関わることになるのだろうか、と考えさせられます。

今はまだ、現役時代の熱量をそのまま持ち続けることはできず、少しずつ距離が生まれている感覚がありますが、それでも自分がア式で得た経験や、築いた関係が色あせることはないはず。これからの社会人生活が始まると、さらにア式に向ける熱量や時間は減っていくかもしれません。しかし、ふとした瞬間に試合結果をチェックしたり、後輩の活躍を喜んだり同期と昔話に花を咲かせたり、そういう形でア式とのつながりは続いていくのだと思います。そして、いつの日か自分も先輩方のように、何かしらの形でア式を支えられる存在になれたらなと、ぼんやり思いました。今はまだ、社会人としての新たなスタートラインに立ったばかり。これからどんな道を歩むのか、どんな困難にぶつかるのか、全く分かりません。それでも、自分がア式で培ったものが、どこかで必ず生きるはずだと信じています。これからも一橋ア式蹴球部が発展し続けることを願いつつ、自分自身も負けずに成長していきたいと思えます。改めて、今までありがとうございました。



## 🏆 ひとつの生き物のような組織

原<sup>ともや</sup>智也（4年FS） 神奈川・浅野高



フロントスタッフの原智也と申します。

おそらくこれを読まれているOB・OGの方でもフロントスタッフと聞いてもピンとこない方も多いのではないのでしょうか。事業活動を中心に活動するスタッフのことを、部内ではそう呼んでいます。とはいえ、私自身がフロントスタッフを名乗り始めたのは3年生の時に、それも、あくまで動画制作やSNS広報が自分のア式での活動のメインになりつつある、と感じたからでした。それまではスカウティングなど競技的な仕事をしてきた時期もありましたし、4年間続けたグラウンドでのマネージャー業務はスタッフとしてのモチベーションの源でした。



本日のスターティングメンバーはこちら！

リーグ戦東京・神奈川11部 第17節  
 VS #帝京大学  
 15:00 KO  
 一橋大学小平グラウンド

試合の様子はYouTubeライブで生配信！...  
[Show more](#)

**STARTING ELEVEN**  
**9.8 SUN 15:00 KO**  
 VS帝京大学 @一橋大学小平グラウンド

41 藤原拓海	14 福田啓太	5 山崎律樹	4 塚本啓大	29 藤原凌	17 西田優希
38 伊崎隼	22 赤金龍之輔	10 笠原悠真	8 森谷高太	20 平賀光	HC 木室孝輔

SUB 1 岡田, 2 安部, 27 若林, 33 大石, 9 堤, 7 齋藤, 11 八巻, 35 五十嵐, 13 西野

FC IKKYO  
Hokusei Gakuin Univ. F.C.

小学校まではサッカーをしていたものの、中高ではサッカー部には関わらず、読書や映画、アニメが大好き。そんな体育会未経験の私は、大学でア式に入りました。一橋ア式の名前を初めて知ったのは戸田和幸さんのコーチ就任のニュースでした。当時からサッカー観戦が好きだった私は、それを機に受験勉強の休憩時間にア式の試合のハイライトを見てモチベーションにしていました。コロナウイルスの流行などもありましたが、無事にア式に入部すると、いろいろな役割をしてきました。4年間を通して、同じことをしていた学年は1年たりともありません。良く言えば器用、悪く言えば飽き性な私は4年になった時、“ああ、何の強みもないゼネラリストになってしまったな”と思いました。何かを極めたスペシャルな人間は組織の強みになります。学生監督としてチームを優勝に導いた近岡先輩、事業部をイチから作りあげた長島先輩、そんな2人を見ていたからこそ強くそう思ったのかもしれない。

ただ引退した今、私はこのことをそれほど悲観していません。

理由は、私が1年生の頃の記憶にあります。当時監督だった戸田さんが、チームが上手くいっている時に“ひとつの生き物のようにピッチを駆け回る”と言っていたこと、そして、あの頃のチームが本当にひとつの生き物のように見えたことが、今までサッカーを見てきた中で最も衝撃的で強く覚えています。それから私の中で「ひとつの生き物のような」姿は良いチーム、良い組織の理想像として存在し続けていました。私のひそかな目標としてア式を、せめて自分の影響が及ぼせる範囲では皆が同じことを考えて活動できるような場所にしようと思いました。そのためには、色んな役割をしてきた自分のような人間がいてもいいのかなと思えたのです。

こんな話をしていると、今も領域をまたいで活躍する何人かの後輩の姿が目には浮かびますが、発展する組織というのは概してそういう人間がいるのだと思います。サッカーっぽく言えば水を運ぶ、潤滑油なんて言えば、就活生の後輩たちから揶揄われそうですが、恥ずかしげもなく書いてみました。総会のたびに組織編成や新たなことへの挑戦があって、困惑や寂しさを覚えるOB・OGの方もいらっしゃると思いますが、私自身は一橋ア式の良いところは常に変わっていくところだと思っています。4年間ご支援・ご声援いただき、ありがとうございました。これからも応援のほど、何卒よろしくお願ひいたします。



## INSIDE IKKYO

まさひろ  
堀内 誠大 (4年FW) 県立富山高



皆さまは INSIDE IKKYO という YouTube のコンテンツをご存知でしょうか？一橋ア式蹴球部は「ア式 TV」というチャンネル名で YouTube 配信をしており、その中のコンテンツの 1 つが INSIDE IKKYO です。自分は大学 1 年の夏以降から 3 年生までこのコンテンツを担当し、リーグ戦の密着動画を提供してきました。もともと動画編集に興味があってこの YouTube 担当になったわけですが、想像以上の重労働でなかなか大変でした。それでも再生回数が何千回と伸びたり、動画のことを褒められると達成感もありました。



INSIDE IKKYO の各再生回数は平均約 500 回程で多いか少ないかは人それぞれでしょうけど、現役部員があまり見ていないことを加味すると多くは OBOG の方々がご覧になっていたのかなと思っています。勝とうが負けようが小平の試合は公開していたので、重苦しい動画も多々あったと思いますが、部のリアルな雰囲気を感じ取ってさらなる応援につながっていたのであれば、これほど嬉しいことはないです。

大学サッカーというコンテンツで再生回数を稼ぐことは、なかなか難しいです。バラエティ寄りの動画を出すべきか、サッカーを突き詰めた動画を出すべきか正解はないですし、目的によっても変わってくると思います。それでもア式 TV は今後もより良く変わっていくと思います。OB.OG の皆さまが今後も「ア式 TV」のコンテンツに興味を持ち続けていただけたら幸いです。最後になりますが、4 年間多大なるご支援をいただいた関係者の皆さまに心より感謝申し上げます。



## ⚽ 1部リーグへの挑戦を振り返って

森谷 <sup>こうた</sup>高太 (4年MF) 埼玉・川越東高



2024シーズン、我々は1部リーグの舞台に挑んだ。

私自身、不安な気持ちも勿論あったが、サッカー人生の集大成を1部リーグで戦えることが非常に楽しみだった。昨シーズンからメンバーが大きく入れ替わりながらも、プレシーズンからのトレーニングで日々成長できている感覚はあった。しかし、終わってみれば2勝3分17敗、最下位で降格。そこまで甘くなかった。高いインテンシティとテクニックで自分たちを上回る相手と、対等に渡り合うことができた試合はわずかしかなかった。リーグ終盤になるにつれ、できることが増えていったのは間違いない。ただ、それを結果に繋げられなかったこと、いつも応援してくださっている皆さんの期待に応える結果をお届けできなかったこと、そして何より、後輩たちに1部リーグの舞台を残すことができなかったことは非常に申し訳なく思う。

しかし、この結果で、こんなことを言うのも気が引けるが、

1部は非常にタフで難しいリーグだったけれども、自分たちがまったく戦えない舞台だったかというそうではないと思う。だからこそ余計に悔しいし、引退して数ヶ月経った今でもあの時あれをしておけば良かったと思ったりもする。また1部に所属することはア式にとって大変意義のあることだと感じた。2024シーズン、練習後、グラウンドに残ってボールを蹴る選手、走る選手がたくさんいたし、オフの期間中にも自主練習している人も多かった。この4年間で余り見られない光景だった。目に見える結果がすべてを語るスポーツの世界ではあるが、そういった背景があったことは皆さんにもぜひお伝えしたい。自分たちが2つも3つも背伸びして、ようやく勝ち点が取れるかもしれないリーグ、厳しいリーグではあったが、一人ひとりが、そしてア式が強くなるのに、これ以上ない舞台であったことは間違いない。

ピッチ外では事業や会計領域などで目に見える成果を残すことができた。

特に事業ではユニホームスポンサーを獲得し、通年開催をしたサッカースクールには、非常多くの子どもたちに参加してもらった。さらにOBの方々のご協力もあって、2025年から事業活動のための法人を設立することも叶った。事業部が設立したのはつい3年前のことであるが、活動の本格化と成果の一部を見届けて引退できるのは非常に嬉しい。事業スタッフが中心になって日頃から地道に行っている地域貢献活動やSNSでのマーケティング活動も、上述の大きな成果をもたらす礎になっていると思う。また、下級生がユニット活動に精力的に取り組んでくれたことに非常に感謝している。

最後に個人的な4年間の振り返りをして終わろうと思う。

1年目は戸田さんのもとで、サッカーの新たな一面を知り、サッカーに取り組む姿勢を学んだ。

2年目は全く試合に出られずに悔しい思いをした。3年目はリーグ優勝を経験した。そして4年目、タフなリーグを戦った。辛く悔しい思いもたくさんする中で、日々サッカーに向き合った。

シーズン終盤にできることが増え、サッカーというスポーツをこれまでで1番楽しんだ瞬間だった。

どれもア式でしかできなかったことで、このような経験ができたこと、日々素晴らしい環境でプレーができたのはOBOGの皆さまのご支援とご声援があったからに他なりません。今後は自分もひとりのOBとして、この愛するクラブを応援し続けたいと思います。4年間本当にありがとうございました。

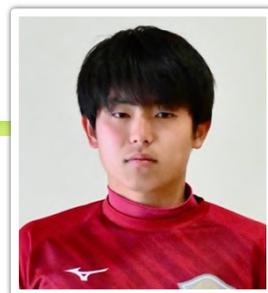




## 令和7年度シーズンに向けて

### 再び1部の舞台を目指して

篠田 啓太（新4年 DF 主将） 東京・暁星高



平素より温かいご支援・ご声援を賜り、心より御礼申し上げます。

1月のOBOG総会では多くの皆さまから“ぜひ1部昇格を成し遂げてほしい”との激励をいただき、寄せられる期待の大きさを改めて実感しました。

皆さまのご期待に応えられるよう全力で日々の活動に取り組んでまいります。

昨シーズンは、7年ぶりの1部リーグ挑戦となりましたが、

2勝3分17敗で最下位と悔しい結果に終わりました。チームとしても個人としても非常に厳しいシーズンで、振り返るたびに「あのときこうしていれば」と思うこともあります。しかし、過去を悔やみ続けていても結果は変わりません。大切なのは、その経験をどう活かし、未来へつなげていくかです。だからこそ、昨シーズンの悔しさを糧とし、今シーズンは「2部優勝・1部昇格」を目標に掲げ、川合新ヘッドコーチのもと、新たな挑戦に臨みます。

今年の2部リーグは、例年よりも試合数が4試合少ない全18試合。その分、

1試合の重みが例年以上に増し、よりシビアな戦いが求められます。その中で勝ち続けるためには、現状に満足せず、自ら課題を見つけ、考え、行動することが不可欠です。そこで今シーズンは、

「自ら変え、自ら挑む」をチームスローガンに掲げ、選手・コーチ・マネージャー・事業スタッフが一丸となり、2部優勝をつかみ取るべく、1試合1試合を全力で戦います。

令和7年度シーズン 東京・神奈川リーグ2部

大学	昨年度	大学	昨年度
◆ 上智大学	1部 11位	◆ 芝浦工業大学	2部 7位
◆ 一橋大学	1部 12位	◆ 日大生物資源科学部	2部 8位
◆ 神奈川工科大学	2部 4位	◆ 東京工業大学	2部 9位
◆ 成城大学	2部 5位	◆ 工学院大学	2部 10位
◆ 創価大学	2部 6位	◆ 東京都立大学	2部 11位

長いシーズンの中では思うようにいかない場面も必ず訪れます。

しかしそんな時こそ、まだまだ未熟ではありますが、主将としてチームの指針となれるように一つひとつの試合、日々の練習に全力で向き合っていきます。そして一橋大学ア式蹴球部が再び1部の舞台で戦うために、最後の笛が鳴るその瞬間まで、ひたむきに勝利を追い求めることをここに誓います。最後になりますが、一橋大学ア式蹴球部に関わるすべての皆さまの期待に応えられるよう、全身全霊をかけて戦います。ぜひ小平のグラウンドにも足を運ばれ、熱い声援を送っていただくと幸いです。今シーズンもどうぞよろしくお願いいたします。



## ⚽ 「自ら変え、自ら挑む。」

かわあい がく  
川合 楽 (ヘッドコーチ) 埼玉・川越高



今シーズンよりヘッドコーチ就任いたしました。

まずは私自身の自己紹介からさせていただきます。埼玉県出身の現在 22 歳、5 歳から 18 歳まで選手としてプレーした後 19 歳から指導者として活動を始め、これまで高校、大学、社会人のチームで指導を行ってきました。一橋大学ア式蹴球部には 2023 年 10 月から外部生ながら学生コーチとして所属し、今シーズンからは社会人としてチームの指揮を取らせていただきます。



### ◆指導歴

- ： 2021 - 2023 千葉県立川越高校蹴球部
- ： 2022 - 2023 東京農工大学サッカー部 学生監督
- ： 2022 - 2023 一橋大学ア式蹴球部 コーチ

### ◆指導者ライセンス

- ： JFA (日本サッカー協会) 公認 C 級ライセンス

昨年はとても苦しいシーズンでした。

部として久しぶりの 1 部でのチャレンジとなり、未知の領域に足を踏み入れるような感覚でした。蓋を開けてみればテクニック、フィジカル、インテリジェンス、全ての面で私たちのサッカーは通用せず結果的に最下位での降格となってしまいました。振り返ってみればプレシーズンの取り組み方や準備から不十分であり、シーズンが始まってしまえば、取り返しが付きませんでした。これには反省と後悔しかありません。一方、選手としても指導者としても、これまで経験したことのないレベルのサッカーに触れることができ、1 部で戦うためには、このレベルを基準にしなければいけないということにも気付かされ、学ぶことばかりの 1 年でもありました。

そして今シーズン、チーム目標を「2部優勝、1部昇格」、  
 チームスローガンを「自ら変え、自ら挑む。」とし、掲げさせていただきました。結果にこだわることはもちろんのこと、私は特にチームスローガンを個人、チームともに体現できるように目指すことを、部員全員に提示をしました。「自ら変え、自ら挑む。」とは何を指すのか。何を自ら変え、何に自ら挑むのか。それを個々人が考えることからこのスローガンは始まります。私は今シーズンが始動してからほぼ毎日“目的意識・課題感を持ってグラウンドに来よう”と選手たちに伝えてきました。自分は何を変えなければならないのか、常に自分自身に矢印を向けて取り組むことを習慣化させなければ、日々のトレーニングは効果が薄くなり、ただの球蹴りになってしまいます。今シーズン、2部からの再スタートだからこそ、ただ目の前の相手に勝つだけでなく、選手としてもチームとしても、スローガンによる意識改革のもと、手応えのある成長を日々味わってほしいと私は考えています。その先に望む結果が待っているはずで

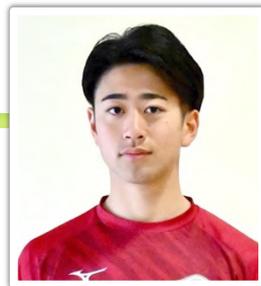
シーズンを通して、多くの苦難が待ち受けていると思います。

それでも自分たちが歩んできた道は間違っていなかったのだと自信を持って前に進んでいけるように、私が先頭となって戦っていきます。最後になりますが、一橋大学ア式蹴球部 OB OGの皆様、日々の多大なるご支援・ご声援のほどありがとうございます。先日開催していただいた総会も緊張感に溢れ、皆さまからのお言葉に身の引き締まる思いがいたしました。今シーズンもリーグ戦、カップ戦ともにホームゲームを開催いたします。是非、小平のグラウンドに足を運んでいただき、選手が躍動する姿を見ていただければと思います。昨年は果たすことができませんでしたが、今年は結果という形で皆さまにお返しができるよう尽力してまいりますので、今後ともよろしくお願いたします。



## 残された時間

八木 琳太郎 (新4年 DF 副将) 東京・麻布高



OB・OGの皆さま、日ごろから一橋大学ア式蹴球部への温かいご支援ご声援、誠にありがとうございます。副将を務めさせていただき八木琳太郎と申します。

私は主将の篠田や副将の八巻と違い、リーグ戦に出たこともありませんので、“お前は一体誰なんだ”と思う方もいらっしゃると思いますが、少しお付き合いください。昨シーズンまでは基本的にBチームを主戦場にしており、サタデーリーグが自分にとっての主な舞台でした。そこでも絶対的な選手になれていたかと言われると決してそうでもなく、シーズン終盤にはスタメンを外れることも多々ありました。そんな折に次シーズンの体制を決める会議で、ありがたいことにチームメイトから副将に推薦をしていただきました。今まで主将や副将を務める方は、私の知る限りでも3年生の頃からチームの中心として試合に関わるような方々ばかりだったので、自分にとって物凄い重圧になると感じましたが、周りから背中を押してもらい務めさせていただくことになりました。

現時点で自分がこの立場を担うのにふさわしい人物かはまだ自信を持って言うことはできませんが、だからこそ、このシーズンが終わり振り返った時に周りから“お前が副将で良かった”と言ってもらえるように務めきることが、任せてくれたチームのためにできることだと思っています。試合に出て活躍することだけがすべてではないし、普段の練習やピッチ外でも常にチームのためにできることを探し、言わなければいけないことは厳しいことでも言う、私は器用な人間ではないですが、自分なりの副将像を作っていけたらと思っています。そして、勿論一選手として今シーズンにかける思いは人一倍強いです。一昨年の2部優勝、昨年の降格、そのどちらも自分は外から眺めるのみで何も貢献できませんでした。しかし、ラストシーズンの今年こそは自分もピッチに立ち、チームの勝利、そして優勝という目標に貢献できるようサッカーに真摯に向き合っていく所存です。

率直に2025年に入ってからサッカーは、ア式に入ってから一番とっていいくらい楽しいです。いろいろ理由はあると思いますが、おそらく今までやってこなかったポジションに挑戦する中で、日々自分の成長を実感できているからだと思っています。今まで中高6年間、そしてア式に入ってから約3年間ずっと右のCBをやってきました。今年もそうなると思っていたのですが、左のCBにコンバートすることになりました。あまり大きな変化ではないと思う方もいらっしゃるかもしれませんが、10年弱同じポジションをやってきた身からすると景色が大きく変わりました。

右利きの自分からすると少しぎこちなさを感じるポジションでした。

それでも周りや楽さんからのフィードバックを受けて実際にプレーしてみる、そしてまたフィードバックを受ける、このサイクルを毎日繰り返していく中で、1日単位で自分のできることが増えていく感覚があり、サッカーの楽しさをこれまで以上に感じています。自分に残された競技者人生はあと1年ですが、サッカーに向き合い続けることで、どこまで上手くなれるか挑戦する1年にしたいと思っています。私個人の話ばかりしてきましたが、チームとしても日々できることを増やしていき、今シーズン後にはOBの皆さまと共に優勝を祝えるように精進していきますので、引き続きご声援のほどよろしく願いいたします。そして、ぜひ小平へ足を運んでいただけましたら幸いです。



## 🏆 再スタート

まるも こてつ  
丸茂 琥哲（新3年DF）北海道・函館ラサール高



大学に入学してから2年。あっという間に月日は流れ、気づけば最高学年のひとつ下になってしまいました。この2年間何をしてきたかと聞かれると半分はア式に費やしたという風に答えると思います。高校サッカーを不完全燃焼で終えた僕にとって、大学でサッカーを続けない理由はありませんでした。新歓期間もア式の体験に毎日足を運び、サッカー同好会などに浮気せず、迷いなく入部を決めたものの、待っていたのは全く想像していなかった現実でした。

早起きにも慣れ始め、部活とバイトと授業の並列が出来始めてきた1年の6月、練習中に左ひざの前十字靭帯を断裂。手術と8か月のリハビリ生活を余儀なくされました。当初はショックと同時に、早く治して怪我をする前よりも強い状態で復帰してやろうと燃えていましたが、8か月という時間は長く、高校時代から残っていた燃料は徐々に腐っていきました。学業もリハビリも適当にこなす毎日。頑張ったことと言えば生活のためにしないといけなかったアルバイトくらいでした。サッカーに打ち込む同期と共に切磋琢磨するのではなく、自分はサッカーとは関係のない高校時代の友人と時間を過ごし、つらい現実から目を背けながら、ただ怪我の治りをだらだらと待っていました。

膝が治った後も、リハビリ不足による捻挫などの小さい怪我を重ね、完全に復帰を果たしたのは2年の4月半ばでした。1個下の新入部員よりも遅い再スタートでしたが、それからは理想の日々でした。サッカーに全力で打ち込める環境、それをサポートしてくれるスタッフやマネージャーの存在、そして何よりも1年間逃げ続けてきた自分と切磋琢磨してくれるチームメイトがいてくれることで、自分ひとりでは全く実現できなかった、充実した日々を送ることができました。もう冷めてしまったと思っていたサッカーへの熱量は、ア式の仲間と過ごすうちに面白いほど蘇り、1日のうちのほとんどの時間、サッカーのことを頭の片隅で考えながら過ごしています。

今では、何でもっと真剣にリハビリしなかったのだろう、何でもっとウェイトトレーニングに時間を割かなかったのだろうかと、後悔ばかりが浮かびますが、そんなことを後悔できるのも、ア式という場所があったからだと思います。腐っていた自分にも、同期や先輩方が温かく迎え入れてくれる場所が、僕にとってのア式でした。それは決してア式が当時の自分のような生ぬるい人間を許容する集団だったというわけではなく、本気でサッカーに向き合いたいと思う人間であれば、その熱意を受け入れてくれる場所であるということです。

そして今年度から上級生となり、ア式の部員としてより一層活躍することが求められる立場になりました。本音を言うと、まだまだ未熟でやっとボールが足につき始めた僕が、後輩を引っ張る存在になれるのかと不安に思いますが、これからア式に入部する後輩たちが、自分と同じようにかけがえのない充実した日々を送れるように、卒業された先輩方から繋がれたバトンをしっかり握りしめて、全力で残りの二年間を走り切りたいと思っています。



## 変化

おばら かずま  
小原 一真 (新2年DF) 愛知・明和高



気付けば怒涛の受験期から1年が経ち、いつの間にか大学1年生としての生活が終わりを迎えようとしています。入学してからいろいろな変化が起きました。初めてのひとり暮らし、汚くなる部屋に、なかなか美味しくならないご飯。帰ったらご飯ができていたこと、洗濯機に放り込んでおけば次の日には綺麗になっておいてあること、これらがどれほどありがたいことか嫌というほど感じさせられました。他には、世の大学生のイメージとかけ離れている朝6時台という起床時刻、高校までのようにテストができなくても心配なかった授業も、今では単位を取るために必死で課題をこなして、出席点を稼いでという生活・・・こんなネガティブな変化ばかり書いていると気分が沈んでくるのでこの辺りにしておいて、ここからはポジティブな変化について書こうと思います。

これらの犠牲と引き換えに、私は自由と最高のサッカー環境を手に入れました。何時に帰っても、急に外食をすることになっても文句を言われることもなく、1時間半以上お風呂に入っている間も“早く出なさい”と急かされることもありません。また小中高とサッカーをやってきた土のグラウンドと違う人工芝グラウンドのおかげで、雨の日も練習や試合ができ、整備のためのトンボがけも必要なくなり、さらには練習後、家に帰ってから靴下やユニフォームの泥や砂を擦って洗うという苦行がなくなりました。この恵まれた環境がなければ大学に入った今、部活を続けられなかったことが容易に想像出来ます。

入学から約1年の月日が経った今も私の周りは、良い悪いに関わらず変化にあふれています。ア式に入って今まで以上に技術や体力、そして考えてサッカーをすることが求められました。入部当初の私はBチームでも試合に出られずに悔しい思いをしていましたが、筋トレをするようになり、練習や試合の動画を見るようになり、より集中して練習に取り組むようになり、少しずつですが試合に出られるようになりました。そして昨期の夏、Aチームに参加することができました。そこでは技術も体力も戦術理解もほとんど通用しませんでした。とにかく自分のできることをしようと考えました。結果数週間でBチームに戻ることになりましたが、このAチーム参加という変化が私に高い基準を示してくれて、今でもとても大切な指標になっています。このように私は変化によって苦しんだこともありましたが、成長することができました。今年のチームスローガンは、「自ら変え、自ら挑む。」  
これからの1年は、今まで以上に変化に富んだ1年にしていきたいです。

最後にはなりますが、一橋大学ア式蹴球部は今期から東京都・神奈川県2部へと舞台を移します。1年での1部昇格に向けて厳しい戦いが待っていると思いますが、チーム全員で力を合わせて勝利と目標の達成を皆様に届けられるように精進しますので、暖かく見守っていただくと幸いです。今期もよろしくお願いたします。



## 続・大先輩たちの遺稿

福本 浩 (昭52卒) 西松会新聞編集長



西松会Websiteにも掲載しているが、昨年5月に届いた資料のことである。その内容に関して、古い順にもう少し詳しく紹介していこう。ただし、部誌『蹴球』9巻に関しては、これまでも何度か紹介しているので割愛する。



＊『蹴球』9巻 (昭和7年創刊)

但し創刊号は川村 通の記事「蹴球團時代」のコピーのみ

＊『予科練習日誌』 (昭和17-18年)

＊『蹴球部部報 オ二号』 (昭和25年8月刊)

＊『蹴球 復刊第一号』 (昭和26年8月刊)

・上記資料はすべて西松会 Website の左サイドバーからダウンロードできる <http://www.yushokaishimbun.com>

### 『予科練習日誌』昭和17年

戦時色が強まっていた昭和17年は、本科3年生の卒業が半年も繰り上げられて9月30日になり、それに伴って従来秋に行われていたリーグ戦が春開催になった年である。そして商大ア式蹴球部は関東1部から2部に降格した。この日誌はチームの再建を期した予科生たちによる1週間の合宿から書き始められている。その一部を紹介していこう。

### 9月22日(火) 晴レタリ雨降リタリ 永倉眞平(予2)記

今年は今迄の夏の合宿とは大分趣を異にしてゐる。

瀬藤さん(瀬藤俊雄 本科2年)から、その事は云われた事であるから割愛する。そして僕が言いたいことは先日の送別会の席上の藤塚さん(藤塚亮策 昭和17年9月卒)の激励の言葉である。

“予科はナメクジみたいであった”と。

誰か反発せざるものあらんや。大いに反省すべきである。

我々の肩の上には重い荷物がのっている。予科生よ。若いんだ。若さに誇りを持って二倍三倍の苦行に堪へて行かう。そして自分が居ないと出来ないんだと積極的にやっていって貰ひ度い。

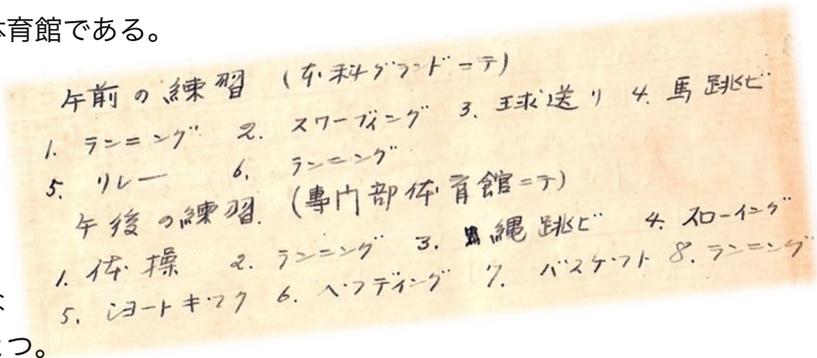
今年は今迄の夏の合宿とは大分趣を異にしてゐる。瀬藤さんから、その事は云われた事であるから割愛する。そして僕が言いたいことは先日の送別会の席上の藤塚さんの激励の言葉である。“予科はナメクジみたいであった”と。誰か反発せざるものあらんや。



練習場所の「本科グラウンド」は現在の国立西キャンパスの陸上競技場で、「専門部体育館」は東キャンパスの屋内体育館である。

大学からサッカーを始める部員がほとんどだったので、練習メニューは基本技術の習得と体力作りがメイン。

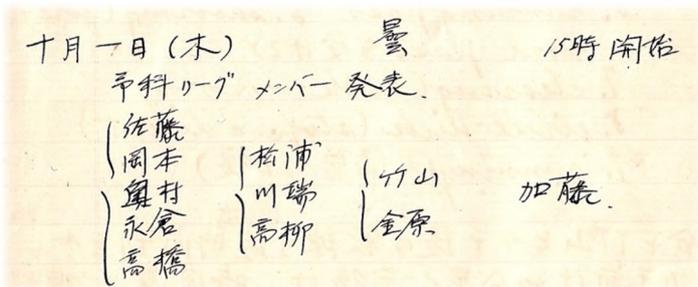
「スワーピング」とは、調べてみると急に体の向きを変えたり回転したりして相手のタックルをかわすラグビーのような動きらしい。1対1の練習メニューのひとつ。



合宿には多くのOBが応援に駆けつけ、共に走り練習したようだ。

3日目の9月24日には創部メンバーの松本正雄先輩も来られ、皆張り切ると記されている。

合宿を終えると、10月4日から始まる予科リーグに備え、出場メンバーが発表された。予科3年だった金原 実、松浦 巖、高橋三善は繰り上げで10月1日から本科生となったが、彼らもメンバーに選ばれているのが興味深い。



10月1日(木)曇 奥村一郎(予2)記

予科リーグと云っても本科生も加わってゐる。我々は本科生に頼ってゐてはならない。我々予科生の元気で引っ張って行かう。我々のとる戦法はキックアンドラッシュだ。これを意気とファイトでもものにしよう。

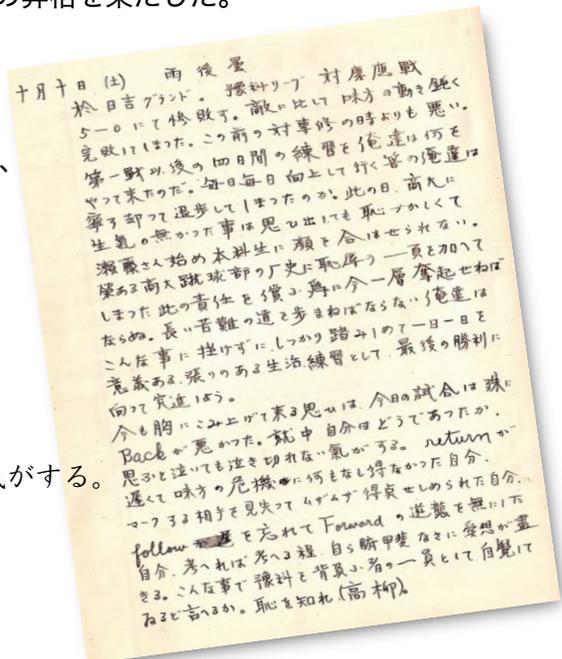
余談になるが、当時のフォーメーションは前列にFW5名、後列にBK5名を並べたいわゆる「WM」で、ボールを奪ったら単純にロングボールを前線に送る、キック&ラッシュ戦法だった。これが一橋では戦後の昭和40年代半ばまで続き、東京都1部リーグでは「一橋の百姓一揆」と揶揄されていたらしい。その後、徐々に4-3-3にシフトし、昭和48年度のチームはサイドバックのオーバーラップやオフサイドトラップなど先端の戦術を取り入れ、関東2部への昇格を果たした。

さて、昭和17年の予科リーグに話を戻そう。

結果は残念なものだった。10月4日 vs 専修大学 3-7、10月10日 vs 慶応大学 0-5、10月13日 vs 早稲田大学 0-4、3戦とも惨敗。こんな反省の弁が記されている。

10月10日(土)雨後曇 高柳 晋(予2)記

於日吉グラウンド。豫科リーグ 対慶應戦 5-0にて惨敗す。敵に比して味方の動き鈍く完敗してしまった。この前の対専修の時よりも悪い。今日の試合は殊にBackが悪かった。就中自分はどうかであったか、思ふと泣いても泣ききれない気がする。returnが遅くて味方の危機に何もなし得なかった自分、マークする相手を見失ってムザムザ得点せしめられた自分、followを忘れてForwardの逆襲を無にした自分、



考へれば考へる程、自ら腑甲斐なさに愛想が盡きる。

こんな事で豫科を背負ふ者の一員として自覚してゐるなどと言へるか。恥を知れ。

その後、練習日誌の記述は11月の関東総合選手権大会、12月の「浦高定期戦」へと続く。ただ故障者が多く満足な練習ができなかった。ともすれば惰性に流れがちになる部員もいて、自らの気持ちを赤裸々に吐露している。

### 11月7日(土) 快晴 川端良三(予2)記

天地神明に誓って真面目な練習をした日は未だ且て無い。毎日練習の何処かで、否多くのところでさぼってゐる。人間といふものは苦痛に対しては全く弱いものだ。併し俺達が蹴球するのに苦痛をともなはなかったら、それは単なる遊戯に過ぎない。要するに打ち込んだ練習、馬鹿になった練習が出来なかったのだ。これからの練習ではどんどん俺をどなってくれ。逞しく男らしい人間になるのだ。

昭和4年から続いている伝統の「浦高定期戦」は、例年予科生だけで挑む。

レギュラーをつかみ取る上でも絶対負けられない試合。“粉碎せんかな 宿敵浦高”を合言葉に、試合直前には剣道場で寝泊まりしながら6日間の合宿を組み、本番に臨む。そして結果は・・・前半の先制点を守り切り1-0で勝利。日誌の最後のページは喜びの言葉が踊っている。

### 12月5日(土) 晴 永倉真平(予2)記

遂に勝った。雌伏久しかりし予科が遂に宿敵浦高を降したのである。

戦前、技術にては叶はぬからファイトで当って行かうと云った皆の気持ちが一つになって、技とファイトの浦高を降したのだ。我等の崑び是に過ぐるものあらんや。

此の勢に乗じて商大蹴球部を盛り上げ行くは我々予科生なるぞ。立たん哉 予科生諸君。

浦高戦勝祝賀会 於中野 立美野・・・名前記載は予科1-2年生



## 『予科練習日誌』昭和18年

関東2部から1部への復帰、これを最大の目標とし  
リーグ戦が始まる2ヶ月前から国立で10日間の合宿を行う。  
まだ新入部員が入る前の予科2-3年生だけの合宿なのだが、  
参加者はわずか8名しかいなかった。

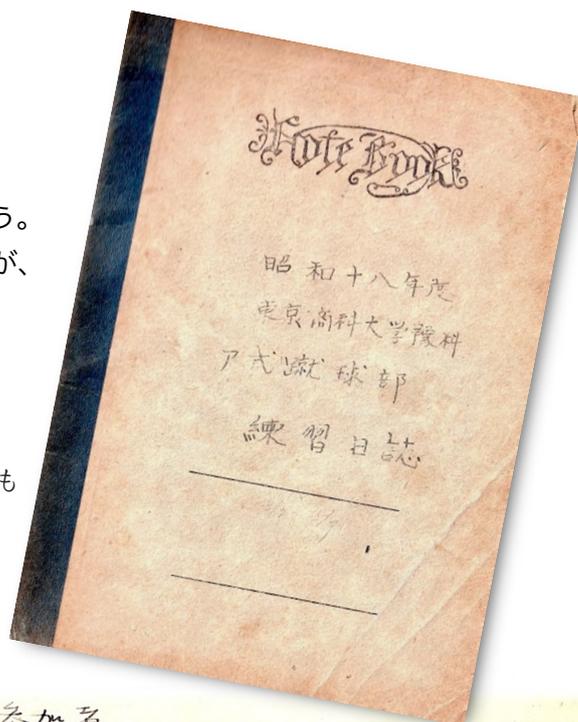
## 3月7日(日曜日) 晴 永倉眞平(予3)記

現在ある商大蹴球部の位置は、各人が勿論充分脳裡に  
刻み込んでいる事だらう。各人各様の考へ方は異なっても  
商大蹴球部を二部から一部へもり立ててゆく目標は  
一つである。お互ひに欠点を知り合ってこそ眞の和が  
得られるのであるから、合宿中は自己を隠さず、  
有りの儘の姿を暴露してくれ。

永倉がこんなことを書いたのには訳がある。

合宿不参加の佐藤裕之(予3)は部生活の継続に  
迷い1月から休んでいたし、松岡忠治(予2)は  
帰省先から戻らず無断欠席、岡本悦吉(予2)にいたっては既に退部届を出していたようだ。

予科参加者  
永倉、奥村、加藤、川端、(佐藤) } 不参加  
高柳、床島、竹山、西浦、(岡本、松岡)



## 3月8日(月) 午前雪、午後晴 寒気厳し 永倉眞平(予3)記

岡本の件、大いに自分も反省すべき鉄槌を下された。まだ～努力が足りないのだ。

3月16日に合宿が終わると、参加していた竹山誠一(予2)と

帰京して4月から練習に戻っていた松岡も、退部に気持ちが傾いていく。

この危機的状況に他の部員たちは悩み苦しむが、自らの部生活を見つめ直す機会にもなり、  
数ページに渡って複雑な心情を記す者もいた。・・・以下、抜粋編集して記載

## 3月30日(火) 曇 高柳 晋(予2)記

毎日毎日 技術の向上を目指して精一杯やってみる積りだが少しもその効が見えないので  
自分ながら嫌になってしまふのだ。課せられた重任を果す為には余りに技術不足であり、  
なんとかしなくてはと焦る許りで、一日も満足に行かない。

## 4月12日(火) 曇 グランド軟し 佐藤裕之(予3)記

グラウンドのみの練習だけで万事終りとしてみていいのか。それだけで人間の心が分るのか。  
予三としての我々五人の姿を今見たら 表面上は結び合っていると見えるかも知れないが、  
各人各人バラバラな方向に向ってゆきつつあるやに見える。

## 4月14日(水) 晴 永倉眞平(予3)記

僕が部生活を貫かんとして行こうとした際の理想は、自分が血みどろになって向かって居る時にこそ  
他の者もついてきて呉れるのではないかと思った。そしてこの考へは僕個人の宗教でさへあった。  
従来それを最上と信奉してきたのであるが、今にしてみても、それが単なる理想にすぎなかった。松岡が  
僕の処へ来ないで直接に本科の方へ行ったといふ事は、僕に相談の資格なしと見たのではあるまいか。

#### 4月15日(木) 曇 后土砂降り雨 加藤春樹(予3)記

佐藤と永倉の記を見ると、要点は予科部員の心からの接觸が無いということだろう。部員同士の眞の和さへあれば大抵は解決できるのではないかと思う。何時迄も抽象論や懺悔文を説べてゐないで、早速 其れに対する具体的な解決案を考へやうじゃないか。長瀬さんの頃には(長瀬凱昭 昭和9年卒) 麻雀をやって部員の親交を計ったと云う。解決のための一方法として読書会・座談会等を通じて予科の思想性を増し親交を計るのも良いと思ふ。

松岡は予科1年の時にリンパ腺の手術で入院し、その後も足の故障が多く、部に戻った後も勉強をとるか部活をとるか、まだ揺らいでいた。しかし先輩たちが記した日誌を読んで、部に戻る決意を新たにす。

#### 4月27日(火) 晴 松岡忠治(予2)記

予三の諸兄は僕に對する非難をば、毛頭念頭におかず先づ部を解ボウし、それから自己反省に行き、皆痛烈に自己を非難しておられる。只「濟みません」の一語に盡きる。僕の目指すのは鍛錬と學問の両立である。自分は決して決して安易な生活を求めてはゐない。部員諸兄よ、俺を取柄のある人間にしてくれ。

さらに戦時下にある商大蹴球部は、当然のことだが、もっと大きな不安を抱えていた。戦局は悪化の一途をたどり、部員たちは度々軍事教練や勤勞奉仕に駆り出され、練習を休みにせざるを得ない日も多くなった。日誌にはこんな記述もある。

#### 3月29日(月) 晴、北風強し 川端良三(予3)記

汗にまみれ、埃にまみれて練習する俺達は一体どうあらねばならぬか。現今の国家情勢を考へて見るならば神國日本は今、喰ふか喰われるかの未曾有の難局に立ってゐる。寧ろ それだけの時間をさいて鋤でも取って勤勞奉仕でもした方がよほど気がきいてゐる。

#### 4月16日(金) 晴 佐藤裕之(予3)記

この超時局下の學徒として心苦しい事が数々感ぜられた事もあった様に思はれる。我々と同じ年配の青年が、真珠湾にシドニに、あれだけのはらの据った行動をとるのを見たり聞いたりする時、自分の至らぬ事、遠きに愧じる次第である。

#### 4月19日(月) 雨 奥村一郎(予3)記

近頃俺の心の中に芽生えてゐる考を述べて皆に批判して貰おうと思ふ。それは俺は日本人である、恐れ多くも陛下の赤子であると云ふ自覚である。そして我々が學問をやるのも蹴球をやってゐるのも之に依って身心を鍛錬して陛下のお役に立つ為である。かやうな考が俺の中であって、この考が單に觀念として取り扱はれたらこれ位危険なものはない。だが、俺の祖先以来の血がさう感じるのである。俺の頭の中は混乱してとりとめもない。日本人だと感じて昂然と頭を上げるが 次の瞬間には自分の無力を反省して見て頭を低くたれる。絶望と思へば自惚てゐる。俺は一体何物であらふか。

こうした状況の中、5月2日、関東2部のリーグ戦がスタートした。ただしサッカー一部が廃止された大学が多く、参加したのは4校のみ。

(法政大学、東京農業大学、東京工業大学、東京商科大学)

それでも商大は3戦全勝し、曲がりなりに、今期最大の目標であった関東1部昇格を果たした。

法政	農大	東工
○ 7 - 0	○ 4 - 0	○ 5 - 1
5/2 小平G	5/15 小平G	5/23 元住吉農大

ここで閑話休題。予科練習日誌ノートのパージをめくっていたら、予科3年の永倉眞平が使っていた定期券（高圓寺⇔商大豫科前）が飛び出してきた。現在のJR中央線も西武多摩湖線も、当時は「武蔵野鐵道」と呼ばれていたことがわかる。そういえば、第1戦vs法政大学、第2戦vs東京農業大学の試合は、小平グラウンドで行われていた。列車にゴトゴト揺られ、いろいろ悩みながら小平に通っていた彼の姿に、しばし想いを馳せてみる。



武蔵野鐵道 商大豫科前駅



商大豫科全景 昭和12年(1937)



昭和18年7月 瀬藤・後藤両兄を送る 於小平グラウンド ・ ・ 他の名前記載は予科生



5月2日のリーグ初戦、法政大学に7-0で大勝し、5月5日には10数人の新入生が入部。部員たちの意気は否応なく上がっていたのに、なぜか『予科練習日誌』は第2戦の前で終わっている。新しいノートの手入が困難だったのか、それとも別の理由でやめたのか、まったくわからない。ただ最後のページに、9月からは予科を率いる立場になる床宿健美(予2)が、こんな言葉を記している。部員への呼びかけではあるが、まるで自分に言い聞かせるように。

### 5月6日(月) 快晴 床宿健美(予2) 記

諸子、一度眼を轉じて現実を見よ。戦ふ学徒。錬成。教練 等々 ・ ・

時局の波は往年の学生々活をば最早認めず。此の小平の森にも学園にも軍の号令はひびく今日なり。

我々は安易なる生活を送るは断固許されじ。人に頼るなかれ。己が本を読み、人格を磨き、己が錬へる、これぞ學問と云い、はた又錬成と云ふ。而して諸子、groundでは大いにあばれよ。

吾を忘れよ。総てを忘れよ。汗せよ。埃にまみれよ。感激はそこから生まれるなり。

それは安易なる感傷ならず。自己の弱さを克服せるよろこびの涙なり。

諸子、希くば生きよ 生きよ、部は吾々の生活の場なればなり。

しかし激化する戦争は、彼らに次の舞台を許さなかった。10月になると

卒業までの徴兵猶予が撤廃され、20歳以上の文化系学生は在学途中で徴兵されるようになる。

10月21日、7万人に及ぶ学徒の出陣壮行会。昭和19年には商大蹴球部員の数はわずか7～8名になり、事実上、部の存続が不可能となった。他の大学も同様の状況で関東リーグ戦は中止を余儀なくされる。

そして、多くの若者の青春を奪い運命を狂わせた戦争は、昭和20年8月15日、終戦を迎える。

昭和24年10月15日 関東3部リーグ開会式

## 『蹴球部部報 オ二号』昭和25年8月刊

『60年史』によれば、昭和24年に関東3部から2部に昇格した記念に第1号が創刊されたが、散逸。なので、この第2号が戦後の焼け跡を生き抜いた部員たちの心情を初めて活字にした貴重な資料になる。冒頭の主将渡辺俊夫の寄稿が秀逸だ。—

総員二十四名の終戦以来の大人数を擁して  
吾がサッカー部は今やはち切れんばかりの胎動の中にある。部員諸兄の一層の奮起を望んで已まない。

——合宿を終えて——

- サッカーとは如何に馬鹿になるかと云ふ事、私一個人の消滅、  
いや、ボールと私の肉体とが一体となってグラウンドに燃焼する事だ。
- ボールは生きていた、死んだものと思っていた私の独善の消滅。
- 魂は暖かく丸いものだ、形がないとは、とんだ謬見（間違った意見）、  
その薪木は、ボールであり、部であり、先輩であり、etc.
- タッチライン —— 私の生命を削る
- ゴールライン —— 私の不徹底を嘲笑する
- ゴール —— 私の精神的未熟を凝視するギロチンだ。

## 『蹴球 復刊第一号』昭和26年8月刊

西松会の活動も復活し、6月17日（日）18時より渋谷キリンビヤホールにて戦後初の総会が開かれた。本誌は戦前の部誌とは違い西松会幹事による現状報告である。創部メンバーである松本正雄先輩も寄稿され、その中で西松会員の結束と支援を訴えている。

最近漸く復興への軌道に乗りかけたやに感ぜられる点もあるがまだ遠し遠しである。白雲万里とでも言いたい所である。併しこれは在學生を責めただけでは無理である。壱年間の部の予算等が八千円では、ボール一個二千円として四個しか買えない。先輩、後輩の精神的なつながりも戦争以来大分薄らいている。蹴球部も齡正に三十歳となった。幾度か試練を経た部である。伝統は力強く存続している。次代の青年を育成することが私ども人生の唯一、最大の義務である。私どもはこの責任を盡すことによって一橋蹴球部を熱愛して後事を託された西松会員の英靈に報いたいと思う。

今は亡き大先輩たちが遺した言葉は、令和の世を生きる我々の胸にも深く響く。

彼らの言葉を噛み締めつつ、謹んで哀悼と感謝の意を捧げたい。

また、貴重な資料の数々を後輩のために保管して下さった石綿浩之先輩（昭39卒 平28逝去）、それを預かり、私に送って下さった池田 致先輩（昭39卒 令5逝去）の奥さまにも感謝申し上げます。願わくば総会などで、西松会員諸氏や現役部員たちが実物の資料に触れられる機会を作れたらと思う。写真やデジタル資料では実感しにくい、80年を越す時間の流れと伝統の重みを感じてもらうために。



## 🏈 ダラスでの生活

佐藤 優起 (平 19 卒) Toyota Motor North America, Inc



2021年1月よりトヨタ自動車(株)からToyota Motor North America, Incに赴任し、アメリカ・テキサス州のダラス北部で生活しております。弊社は2017年に製造事業体(ケンタッキー州)と販売事業体(カリフォルニア州)が合併し本社をテキサス州プレイノ(ダラスの北部に位置する都市)に移転しました。北米でのトヨタ・レクサスブランドの生産・販売事業を統括する地域ヘッドクォーター機能で、私は部品サプライチェーンを統括する業務を実施しています。ご存じの通り新トランプ政権のもと様々な変化点がある中で、お客さまにより良い車をいち早くお届けするべく日々奮闘しております。コロナ禍でのサプライチェーン異常・半導体の不足など様々な困難を身をもって味わってきました。今後は関税政策など先行きが予期できない困難が、たくさん待っているだろうとビクビクしながら仕事をしています。米国トヨタ・レクサスでは日本ではお乗りいただけないタコマ・タンドラといったピックアップトラックや多種類のセダン・SUVを展開しています。是非アメリカに赴任の皆さまには、トヨタ車をリース・ご購入いただきたいものです。何とぞごひいきのほど、よろしくお願いいたします！笑



← 右から2人目が筆者



### ■アメリカのサッカー事情

アメリカの4大スポーツをご存じでしょうか？

答えはアメフト・バスケットボール・野球・アイスホッケーです。残念ながらサッカーは入っておりません。つい先日もアメフトのSuper Bowlがニューオーリンズにて開催されましたが、凄まじい盛り上がりようでした。ダラスには幸いにもすべての4大スポーツのプロチームがあり、身近にスポーツ観戦を楽しむことができます。

さて、サッカーですが、アメリカのプロサッカー(MLS)は計30チームから構成されており、2リーグ(ウェスタンカンファレンス/イースタンカンファレンス)それぞれの上位9チームがプレイオフに進み年間王者を決定します。2024年度の王者は、吉田麻也も所属するLA Galaxyでした。

私が住むダラスにも FC Dallas というチームがあり、シーズン中はまあまあな盛り上がりを見せます。まあまあ賑わいなので、あまり混雑することなくリラックスしてサッカー観戦ができます。昨年は残念ながら 11 位でシーズンを終えましたが、今年も是非応援に駆け付けたいと思っています。シーズンもつい先日、2 月 20 日に開幕いたしました。私自身すっかりサッカーとはご無沙汰なのですがダラスには駐在員・永住組合めた日本人サッカーチーム、また日本人留学生がコーチをしてくれるお陰で日本人の子供たちが週末サッカーを楽しんでおります。



## ■ダラスの生活

ダラスの気候の特徴は、暑い！雲のない快晴！という日が、かなり長く続くということです。年に 1～2 週間くらい大変寒い日が続きますが、それ以外は、基本温かい・暑い！ 広い青空の元気持ちがいい日が続くのが特徴的です。そして、生活をしていて思うのは人種の多さです。私が住むエリアでは白人・黒人・ヒスパニックに



加え、アジア人（中でもインド系がダントツ）も多く見られます。こういった状況もあり、生活をしていて人種差別を受けるという経験は、今までに幸いながらありません。私の子供たちも赴任当初は言語面で苦労しましたが、アメリカならではの“褒めて育てる”教育スタイルもあり、先生方の温かいサポートで環境になじむことが出来ました。近年ではカリフォルニアからダラスに移住してくる方や企業も多く（テスラはじめとした）、赴任した 4 年前から現在も含めて、常に住宅・商業施設の建設がひっきりなしに行われており、大変活気がある地域になっています。

## ■ダラスの食生活

### ①スーパーマーケット

アジアコミュニティも多い町であるため、アジアスーパーがかなり多くあり、生活をしていくうえで何も苦労はありません。H-Mart（韓国系）・99 Ranch（中国）・Mitsuwa（日本）をはじめとして、欲しい食材は大体手に入れることが出来ます。もちろん価格はインフレもあって大変高く、キューピーマヨネーズが 9～10ドルするような時期もありました。

## ②レストラン

テキサスといえば、テキサス BBQ ということで、街には多くの BBQ 屋が見られます。日本では BBQ という外で焼肉をすることを思い浮かばれるのではないかと思います。こちらでは大きな肉やソーセージをスモークしながら低温で調理したものを指しており、ステーキレストランとはその点で違ったコンセプトを取っています。価格も比較的安いので人気店では行列が出来ることも多く見られます。初めて食べたときはあまり感動がなかったのですが、食べれば食べるほど店ごとの特徴やその奥深さが分かり、楽しむことが出来るようになりました。日本食レストランも多数あり、日本人が経営しているようなレストランも数多くあります。中でも Ebesu というレストランは秀逸！アメリカ人からも愛され、週末には予約が取れないほど人気の店です。また CoCo 壱番屋や牛角など日本食レストランも多く進出し始めており、出向員にとってはありがたい限りです。



## ■余暇の過ごし方

上記の通り生活をしていくうえで何の苦勞もないガラスですが、これといった観光の場所がないのがいたいところです。週末はもっぱら子供の補習校への送り迎えと、サッカーへの付き添いで大体終わってしまいます。長期休暇にはアメリカならではのナショナルパーク巡りをしています。テキサスにもビッグベンドナショナルパークというところがメキシコとの国境にあり、大自然を堪能することが出来ます。



## ■最後に

現役の皆さんの活躍いつもFacebook等を通じて楽しく拝見しています。

私が現役の時に比べて、時代の変化とともに外部への活動の発信や、もちろん活動・成績も大きくレベルアップしているように見受けられ頼もしい限りです。私も大学を卒業してはや18年が過ぎます。恥ずかしながら愛知に身を置く会社で仕事をしていることもあり、卒業以来一度も国立・小平に足を運べていません。帰国の際には小平で是非皆さんの活躍を応援できる日を心待ちにしています。



## 🏆 サッカーは人を繋ぐ

阿部 真琴 (平 22 卒) 三井住友海上 / MSIG LIFE Insurance Indonesia

私は 2023 年 4 月からインドネシアの首都ジャカルタに駐在しています。こちらでは生命保険の子会社（本社は損害保険の会社です）に勤務しており、営業担当として日系企業を中心に団体向けの医療保険や年金商品を取り扱っています。こちらに来てから約 2 年が経過しようとしておりますが、仕事にサッカーと日々充実した生活を送っています。この度、海外便りを寄稿する機会をいただきましたので、ほんの僅かではありますが、インドネシアでの生活環境やサッカー事情などを紹介させていただきます。



## ■生活環境

インドネシアは赤道にまたがる約 1 万を超える島によって構成され、面積は日本の約 5 倍、人口は世界第 4 位の約 2 億 7 千万まで増えています。人口ボーナスも続いており、若い世代が多く、日々成長しているエネルギーを感じます。

気候はイメージできるかと思いますが、1年中30℃前後で推移していて季節も雨季と乾季しかありません。気候変動で毎年少しずつズレてますが、今は大体4月～10月が乾季、11月～3月が雨季になっています。生活しているジャカルタは、自分の出身である茨城県古河市の10倍以上の大都会で、高層ビルやアパートメント、高級モールが立ち並んでいます。一方で、交通渋滞やそれによる大気汚染が深刻な社会問題となっており、車で10分で到着する場所が、時間帯によっては1時間かかるということもざらにあります。渋滞解消のためにジャカルタ市内の幾つかの大通りでは「偶数奇数規制」と呼ばれる渋滞解消策がとられています。朝6～10時と夕方16時～21時の間、偶数日はナンバープレート末尾の数字が「偶数」のみ通行可能で、奇数日は奇数のナンバープレートが通行可能です。ちなみに全く効果は感じられません。



オフィスからの風景

食事は首都ということもあってインドネシア料理に加えて日本食や洋食、中華もひと通りそろっており、舌がバカな私は何を食べても全て美味しく楽しめています。一般的なインドネシア料理はナシゴレン（炒飯）、ミーゴレン（焼きそば）、ソトアヤム（チキンスープ）、サテ（焼き鳥）などで、どれも美味しいですが、インドネシア人は辛いもの好きで、サンバルというチリソース的なものをつけて食べています。私はすぐにお腹を壊すので、サンバルはあまりつけません。



\*左はワンプレートに肉や野菜が乗ったローカル料理  
飲み物付きで300～400円くらい

\*下はコンビニで売っているサンバル  
出張者の日本への土産によく勧めている



■サッカー事情

インドネシアのサッカー熱はとても高いです。日本でいう J1 と J2 の 2 部構成になっていて、インドネシア各地の都市にチームがあり、毎週熱戦を繰り広げています。日本人も数名所属しています。昨年 11 月には W 杯予選の日本戦がインドネシアのホームで行われ、結果は 4-0 で日本の勝利でしたが序盤はインドネシアがチャンスを作り、その度に会場は大盛り上がりでした。ジャカルタのスタジアムで開催されたので同僚と一緒に観戦しましたが、“日本にはやっぱり適わない”と、圧倒されたようでした。インドネシアはオランダと歴史的な関係を持っていることから、インドネシアにルーツを持つオランダ人選手をどんどん帰化させ、代表チームの強化を図っています。監督もつい最近に韓国のシンテヨンからあのクライファートに交代しました。所属するグループ C の 2 位以下は混戦で、インドネシアにもまだまだチャンスがあり、今後も楽しみです。

\*2024. 11, 15 日本 vs インドネシア 4-0



← スマホで生配信を見ながら大声で国歌を歌うインドネシア人の同僚 2 人

【ハイライト動画】

[https://www.youtube.com/watch?v=q\\_3itKG2Awg](https://www.youtube.com/watch?v=q_3itKG2Awg)

Group C		勝点	得失差
1	🇯🇵 日本	16	20
2	🇦🇺 オーストラリア	7	1
3	🇮🇩 インドネシア	6	-3
4	🇸🇦 サウジアラビア	6	-3
5	🇵🇸 パーレーン	6	-5
6	🇨🇳 中国	6	-10

← 田尻一真くん (平 31 卒 ジャカルタ駐在) も奥さま、同僚 2 人と観戦に来ていた。



プライベートの方のサッカーでは、私はジャカルタの日本人チームに所属しています。20~60 代の 50 名程度が在籍していて、思っている 10 倍レベルが高いです。アントラーズユースのキャプテンで高円宮杯で優勝シャレを掲げている若者 (彼は途中でモンゴルのプロリーグへ) や、高校時代に中村俊輔の FK 練習を受け続けたキーパー (この方も選手権で優秀選手に選ばれている)、ユース年代の代表経験者など、他にも色々と凄まじいキャリアを持っている選手がたくさん在籍していて、とても充実したサッカーライフが送れています。少し前はチームメンバーと同じアパートに住んでいる元イタリア代表のマルコ・モッタさん (インドネシアで引退し、そのままこちらでビジネスをしている) が助っ人に来てくれました。その日は彼が 2 点取ってくれたおかげで普通に勝ちました。活動としては平日にフットサル、土日にはインドネシア、欧米、アフリカ、韓国系のチームが、それぞれ総当たりして優勝チームを決めるインターナショナルリーグが行われています。



上左の写真はアフリカンチームとソサイチした際のもの。インドネシア人は SNS 好きなので容赦なくアップされ放題です。ちなみに右の写真はペナルティーエリア付近でファウルし、イエローをもらった時のものと思いきや、“この人 審判の足を踏んでいる（泣）”と書かれています。

ところで、現在インドネシアには一橋サッカー部 OB が私を含め 4 名いて、勝手に「酉松会ジャカルタ支部」を発足し、定期的に飲み会やゴルフを開催しています。またシンガポールに駐在している OB 5 名との合同酉松会も結成し、先日、第 1 回「IDN・SG 酉松会」を開催しました。



#### 酉松会ジャカルタ支部

左から、林 亮太郎さんと中島智昭さん（平 19 卒）、一番右が私です。厳密に言えば、林さんはスマトラ島パレンバン駐在。他に、田尻一真くん（平 31 卒）がジャカルタにいますが、この日はあいにく欠席でした。亮太郎さんとナカジさんは私が 1 年次の時の 4 年生で、小平グラウンドと一緒にボールを蹴っていました。



#### 第 1 回 IDN・SG 酉松会

左から池田圭吾ジェイスンくん（平 25 卒）、私、同期の高橋悠基くん（平 22 卒）、亮太郎さん（平 19 卒）、そして一番右の林 良二郎さん（平 16 卒）とも再会できました。

## 【インドネシア・シンガポール 西松会】

〈インドネシア 駐在〉			〈シンガポール 駐在〉		
中島 智昭	平19卒	東レ インターナショナル	林 良二郎	平16卒	日本郵船
林 亮太郎	平19卒	伊藤忠商事	高橋 悠基	平22卒	住友商事
阿部 真琴	平22卒	三井住友海上	池田 圭吾 ジェイスン	平25卒	東レ インターナショナル
田尻 一真	平31卒	丸紅	彦坂 達哉	平25卒	三菱 UFJ 銀行
			中野 圭祐	平29卒	丸紅

最後に、アジア周辺で日本人チームに所属している方であればご存じかも知れませんが、J-Asia というアジアの駐在員サッカー大会が、毎年持ち回りで開催されています。私が赴任した2023年はジャカルタ、2024年はバンコク、今年はマレーシアのクアラルンプールで開催されます。この大会で、2023年の西松会新聞「海外便り」に寄稿されている角井朋之さん（平11卒/ミャンマー）、在学中と一緒にプレーした戸谷雄貴くん（平25卒/深圳）や彦坂達哉くん（平25卒/シンガポール）とも再会しました。その他にも過去社会人チームと一緒にプレーしたメンバーにも合うことができ、サッカーの素晴らしさ、そして、この寄稿のタイトル「サッカーは人を繋ぐもの」を実感しています。私はよっぽどのことがない限り、おそらく今後どこにいてもサッカーを続けていると思います。皆さまとも、いつかどこかで、一緒にボールを蹴る日を楽しみにしています。

2024年のJ-Asia (バンコク開催)

ジャカルタからは2チーム参加しましたが、私はAチームの方でプレーすることが出来ました！



## 🏠 北緯 1 度の国 シンガポールより

池田 圭吾 ジェイスン (平 25 卒) Toray International Singapore



赤道直下で高温多湿の国、シンガポールに 2024 年 6 月から住んでおります。  
近況を以下ご報告申し上げます。

### ■シンガポールを見て感じること

埋め立て事業により徐々に国土面積を増やしているシンガポール、ひと昔前は東京 23 区と同じ面積と言われていましたが、今は奄美大島以上まで大きくなっているそうです。いまいち想像しづらい比較ですが、“50 年で国土を約 1.25 倍にした”と聞けば、この国の良い意味での必死さを窺うことが出来ます。シンガポールは、建国の父と謳われたリー・クアンユー元首相が独立を宣言した 1965 年 8 月 9 日から 60 年間、天然資源の欠乏や水源の乏しさ、国防能力の脆弱さと、今も戦い続けていると言われていています。軍事費の規模は日本の 1/6 程度ながらも GDP に占める割合は日本の 3 倍弱、18 歳から 2 年間の徴兵制度もあり、毎週土曜日には戦闘機が市街の上空を、爆音を鳴らしながら飛び回ります。食料も約 9 割を海外からの輸入に依存している為、3 割程度まで自給率を引き上げようと努力を続けています。ゆえに国の様々なシステムの更新やルールの改善のスピードも緩みがなく（その都度規則に対応しなければならぬ企業側はしんどいのですが）、現状よりも洗練させていこうとする強い意志、小さく資源も無い独立国だからこそその必死さが、私がシンガポールを見て最も印象的に、そして刺激的に感じていることです。



余談ですが、空港の出国と入国では顔認証パスでパスポートを読み取る必要がなく

（現地人や就労ビザ等に限定されますが）、他人の銀行口座へもスマホアプリ 1 つで簡単に手数料なしで送金できます。観光でシンガポールに来られる方も、クレジットカード 1 つあれば電車（MRT）もバスも事前登録なしで、そのまま利用できますので、便利さには舌を巻くばかりです。



## ■シンガポールと日本について

日本とシンガポールは今でこそ経済・文化・観光など多方面で良好な関係を築けていますが、過去に遡れば戦争という悲しい繋がりがあることもシンガポールに来て学んだ大事なことのひとつです。1942年、日本は第二次世界大戦中にイギリス軍を破りシンガポールを占領、シンガポールの名称を「昭南島（しょうなんとう）」に改名し統治下においた歴史があります。駐在してから最初の週末に近くの国立博物館に足を運びましたが、生々しい戦時中の資料が膨大に展示されており、そのほとんどが日本に関係するものでした。にも関わらず、シンガポールの日本人への感情はフラットに近く、「過去は過去、今は今」という価値観を多くの方が持っていることも勉強になりました。

シンガポール  
国立博物館



## ■仕事について

シンガポールは経済成長を成し遂げた金融業を主軸に据え、加えて近年は半導体や集積回路ICなどの電子機器分野や観光業の回復基調が好影響を与えていること、人口知能AIやクラウド技術の導入など、デジタル化と技術革新にも注力していると報告されています。また国内での転職活動も頻繁で流動性が高く、特に若い世代ではキャリアアップや新しいスキルの習得に積極的であることも知られています。ところが、弊社グループの数ある海外拠点の中でも古い歴史を持つシンガポールオフィスでは、日本人の駐在員は約4年毎に入れ替わりますが、長く働いてくださっているローカルの方が多く、勤務歴30年以上の方もいらっしゃいます。それが良くも悪くも影響してか、弊社オフィスでは旧態依然とした仕事のやり方が残っており、大量の紙書類が日々コピー機から吐き出されている状況です。流石に、ということで、会社を挙げてペーパーレスに向けた取り組みも始めていますが、新しいシステムの導入に抵抗感を覚える方も少なくなく、オフィスで最も若手である私が「パソコンに詳しい日本人」として、有難いことに頻繁に呼び出しを受け重宝されております。国に感じる印象と、実際に一緒に働く方から感じる印象のギャップも面白く感じたことのひとつです。一方、海外あるあるなのは分かりませんが、弊社では年1~2回ほど社員参加のイベントが催されます。昨年は会社で小型船舶を借りての海上バーベキューや、社員の誕生日パーティーがありました。



少し悲しい話となりますが、つい数年前の2020年頃は1SGD = 80円弱でしたが、今は1SGD = 111~116円と大幅に円安が進行。弊社では一定期間毎に給料に適用する為替を見直す形式を取っておりますが、先日、日本円を現地通貨に変えて支給される部分での額面は、残念ながら減ってしまいました。。

## ■グルメについて

固い話が続きましたが、食べ物事情についてご紹介させていただきます。

まずは何と言ってもホーカーセンターの存在です。簡単に言ってしまうえばクーラーのないフードコートで、多民族国家シンガポールならではの中華料理、マレー料理、インド料理など、さまざまな国の料理を安く食べることが出来ます。ランチで蕎麦とかつ丼のセットを頼めば、消費税9%とサービス料10%がのし掛かって3,000円に到達するシンガポールですが、ホーカーセンターを利用すれば、500円前後でご飯を済ませられます。駐在直後で住居も決まっていなかった慌ただしい頃は、とりあえずの駆け込み寺として特にお世話になりました。シンガポールは中国系の方が最も多く、公用語である英語も独特のシンガポール訛りの為、最初は何を言われているのか聞き取りが難しかったことをよく覚えています。

\*ホーカーセンター Hawker centre : 廉価な飲食の屋台や店舗を集めた複合施設



バクテー



チキンライス



チリクラブ

シンガポール料理の定番として、チキンライスやバクテー（豚あばら肉のスープ煮）、チリクラブ（カニの甘辛チリソース炒め）などが挙げられます。お金さえあれば揃えられないものはないと言われるシンガポールですので、フレンチやイタリアンなど世界各国の料理店も連なっています。

## ■観光スポットについて

まずは、マリーナベイサンズとマーライオンは外せないかと思います。

意外と距離がありますので歩きやすい靴が推奨です。またセントーサ島には、ユニバーサル・スタジオ・シンガポールや水族館 S.E.A.アクアリウムがあり、家族連れにもお勧めです。またリトルインディアやチャイナタウンなど、多文化が融合したエリアも見どころです。隣国マレーシアもすごく近いので、レゴランドもお勧めします。



## ■サッカーについて

2020 年末からシンガポールに赴任している同期の彦坂達哉（平 25 卒）の伝手を頼り、すぐに日本人サッカーチーム（Mogura FC）に所属いたしました。シンガポールは人口 600 万人の内、3 万人強は日本人駐在員が占めており、多くの日本人チームがあります。その為、幸運なことに日本人リーグと現地リーグを交互に組み合わせ、毎週末にサッカーが出来る環境にあります。グラウンドの多くは中学校や高校を借りることが多く、たまにスタジアム形式です。

### Mogura FC



稀に試合後、住居（コンドミニウム）で焼肉パーティーを開くこともあります。  
 またシンガポールではサッカーは人気スポーツで 1996 年に設立された国内リーグであるシンガポール  
 プレミアリーグがあり、地元チームだけでなく、日本から唯一アルビレックス新潟シンガポールも  
 参加しております。直近のリーグ成績は 9 チーム中 4 位。サッカースクールも開催しています。



## ■現役へのエール

部員が70人を超える大所帯で東京・神奈川リーグを闘う皆さんをOBのひとりとして誇りに思っています。私が現役部員だった2008～2011年は、プレーヤーが各世代に10人弱ほどしかおらず、何人かの怪我人が重なると紅白戦もままならないような状況でした。部員が多いことは、それはそれで多くの苦労があることも聞き及んでいますが、切磋琢磨してチームの総合力を上げていけるよう日々の練習に向き合っていたいただければ幸いです。また今でこそ、小平には他のチームに見劣りしない綺麗な人工芝グラウンドがありますが、つい数年前までは、なかなかの悪評で有名でした。凸凹でむき出しの土、雨が降れば巨大な水たまり、試合が終われば毛穴が真っ黒と、いろんな意味で思い出深い場所です。当時、東京大学に練習試合で小平に来てもらって、去り際に“二度と来るか！”と言われたことをよく覚えています。試合には負けました。2024年度も22試合の内6割強が小平のホームグラウンドとのことですので、地元ファンの声援も力に変えて、リーグタイトルを目指し、ぜひ頑張ってください！

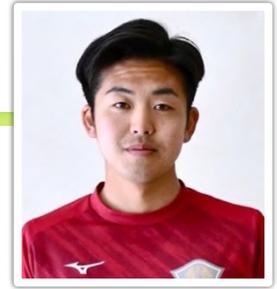
\*平成23年度(2011)の秋季リーグ開幕戦・・筆者3年次



円内の写真は2019年

## 一生の同期

五十嵐 <sup>ひな</sup>日向大 (4年FW) 東京・三鷹中等教育学校



時刻は 22 時前、フィンランドのオーロラの下で執筆を始めます。昨日の夜にも綺麗なオーロラを沢山見ることができたので、怖いことにオーロラに慣れてきてしまいました。その証拠に、主将の山崎もオーロラに見向きもせず、隣のベッドで見たこともない漫画を読んでいます。1 週間ほど前に単身でフィンランドを訪れ、1 度もオーロラを見ずに日本へ帰国した羽根くんが可哀想で仕方ありません。

\*ロヴァニエミ：凍った川の上でオーロラ鑑賞



五十嵐・山崎・森谷・鈴木・外池

\*ヘルシンキ：湖の岸辺でスモークサウナ



山崎・五十嵐・鈴木・外池

フィンランドは 3 週間のヨーロッパ旅行の 1 カ国目で、この後にドイツ、オーストリア、イタリア、スペインを訪れる予定です。明日にはドイツへ発つため、早くも 1 カ国目が終わろうとしており、長くて憂鬱ですらあったヨーロッパ旅行が一瞬で終わってしまうような予感がしています。そしてこの旅行が終わると、もう間もなく社会人になります。小学生だった頃が、昨日のこのように思い出せるにも関わらず、約 1 ヶ月後には社会に出ようとしているのが、不思議でたまりません。おっと、向こうで森谷くんがシャワー室に閉じ込められたと騒いでいます。部活ではあんなに頼もしかった森谷くんも、旅行では可愛いものですね。卒部ブログにも書きましたが、自分がア式に入って良かったと 1 番思うことは、仲間との出会いです。現在一緒に旅行しているのも同期ですし、彼らとは今後何十年も付き合い続けていくんだろうなと思います。1 月に開催された OB 総会で OB の方同士が楽しそうにお話されているのを見て、素敵だなあとしみしみ感じていました。自分も、OB の方々のような関係性を同期と築けていければと思います。

\*ロヴァニエミ：サンタクロース村にて



左から 森谷・外池・五十嵐・山崎・鈴木

## 🏆 バングラデシュ旅行記

大石 俊輔（4年MF） 東京・三鷹中等教育学校

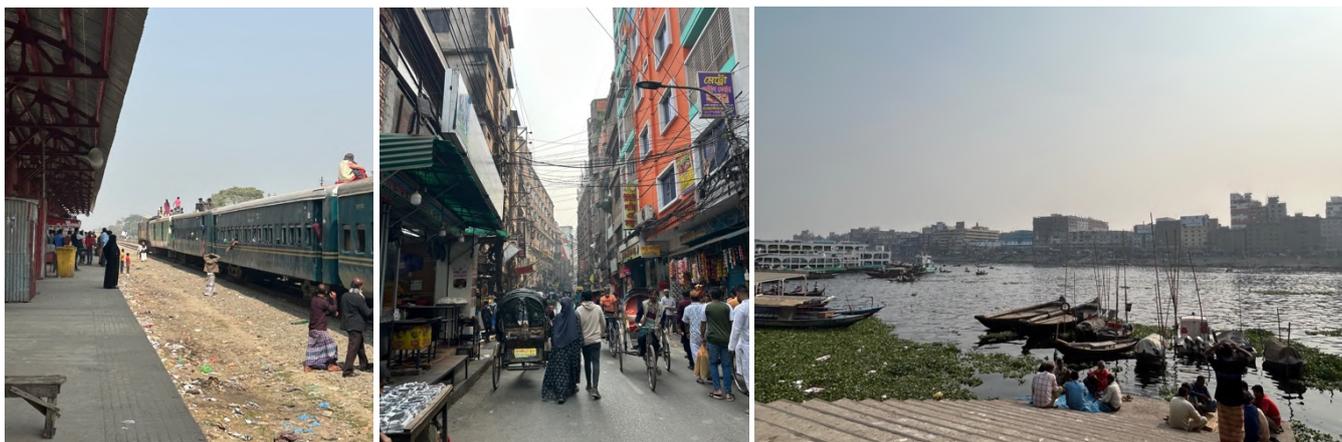


私は2/4～2/10の7日間、バングラデシュに旅行に行ってきました。  
 バングラデシュは多くの人にとってあまり馴染みのない国だとは思いますが、  
 屋根の上まで人であふれかえった列車の写真を見たことがある人はいるのではないのでしょうか。  
 実は、あの景色は年に1回 ビッシュョ・イジュテマ Bishwa Ijtema と呼ばれるイスラム教の集会の時に  
 だけ見られるもので、まさにこれが私の旅の目的でした。結論から言うと政変により集会が延期されて  
 しまい夢見ていた景色を見ることは出来なかったのですが、ダッカ郊外のトンギ駅で列車の屋根にまばら  
 ながら人の姿があり、僕も乗っていいかと聞いたところ危ないからやめておけと止められてしまいました。  
 それでも謙虚で優しいバングラデシュの人たちに助けられ、最高の旅になりました。

\*トンギ駅

\*オールドダッカ（旧市街）

\*現地の人々が沐浴などをするショドル・ガート



現地の高校生と一緒にサッカーをしたり、モスクで偶然出会った同い年の青年の家に泊らせてもらうことになり、一緒にイスラム教の礼拝に10回以上も参加したり、はたまた彼の家に出入りする近所の子供たちと一緒にUNOで遊んだり、たくさんの楽しいことがありました。いつかまた、彼らに会いに戻りたいと思います。



話は変わりますが、私がサッカーを大好きだった理由も、今回の旅と同じように、刺激と良き出会いに満ちていたからではないかと思っています。15年間のサッカー人生が終わり、人生の第2章に突入しつつあるわけですが、これからも幸せな人生を送れるよう、感謝の気持ちを忘れずにいたいと思います。最後にはなりますが、昨シーズンも現役部員へのご支援をいただきありがとうございました。今後ともよろしく願いいたします。



## 🏃 フルマラソン

加久保 陽太<sup>ようた</sup>（4年DF） 東京・青山高



1月末、同期の森谷、山崎、塚本（現地までの運転係とサポート）と共にフルマラソンに挑戦した。引退してから2週間ほど経ったある日、森谷から“マラソン出るぞ”と急に連絡が来た。当時の自分は、運動する機会ができて丁度いいかと、軽い気持ちでマラソンに参加することを決めた。

数日後、試しに10kmほど走ってみることにした。

そこで早くも参加を決めたことを後悔する。10kmはフルマラソンの4分の1にも満たない距離であるのだが、終わりがまったく見えなかった。何度時計を見ても進まない時間と距離。走り終わった後、本番はあと30km以上もあるのかと軽く絶望した。しかし、森谷も山崎も記録を目指して練習しているらしかったので、そこに負けないようバイトや遊びの合間を縫って走り込みを続けた。

迎えた本番。山崎は最初からペースを上げて先に行ってしまったので、森谷と共に走ることにした。練習ではハーフマラソンまでの距離しか走ったことがなく、走り切れるかどうか不安だったが、以外にも30km過ぎまでは余裕を持って走ることができた。しかし、30kmを過ぎたあたりで足が攣り始めた。そこで森谷に遅れをとる。かなりいいペースを刻めていたのだが、一気にスピードが落ちて一応目標にしていた4時間切りに暗雲が立ち込めた。そこからゴールまでの残り10kmほどは今までの人生で最もきつい時間だった。

自分より遥かに年上のおじいちゃんランナーに抜かれ続け、頭の中では幾度となくリタイアがよぎった。心身共にボロボロであったが、何とか踏ん張り気持ちだけで走り続けた。残り2km程となったところで前方に森谷を発見した。かなり疲弊しており、とりあえず森谷だけは抜こうと思ったが追いついた時点で自分の体力は既に尽きてしまい、結局振り切られてしまった。結果は3時間56分37秒と、何とか4時間切りは達成することができた。スタートからペースを上げて1人で走っていた山崎は、3時間半を切っていたらしく主将の格の違いを見せつけられた。



「勝田全国マラソン」・・茨城県ひたちなか市 / 東海村



走り終えた後は、まともに歩くことすらできなかった。

現地まで車を運転し、帰りも駅まで送ってくれた塚本には頭が上がらない。この日の MVP である。そして、もう二度とフルマラソンはやらないと心に誓った。これより心身が削られるイベントはそうそうないだろう。辛くなった時はこの日を思い出して、社会人生活を過ごしていきたいと思う。



## ⚽ ア式での最高の経験

かさぎ ゆうま  
笠置 悠真 (4年FW) 千葉・稲毛高



私は今、ア式の同期とのヨーロッパ旅行を楽しんでいます。歴史ある街並を歩いたり、その土地の食事を嗜んだり、さまざまな土地の文化や人々と触れ合っています。旅行中、何度かスタジアムに足を運び、サッカーの試合観戦もしてきました。どの試合も素晴らしかったのですが、特に印象に残っているのは、バイエルン・ミュンヘンのホーム、アリアンツアレーナでの一戦です。





その場の熱気と応援の力強さは言葉では言い表せないほどで地鳴りのような轟音がスタジアム全体を包み込み、私はただただその光景に圧倒されました。何度も背筋が震え、鳥肌が立つのを感じました。これこそがサッカーが持つ魅力のひとつだと強く実感した瞬間でした。サポーターの声援に包まれながらプレーしているプロの選手たちは、なんて羨ましいんだろうと感じるとともにその壮大な雰囲気を感じました。

そんな思いを抱えつつも、私は自分にも似たような感覚を味わった瞬間があったことを思い出しました。それは、私が所属しているア式のリーグ戦、特に16節の東京学芸大学との試合のことです。あの試合は、私にとっても忘れられない最高の経験となりました。

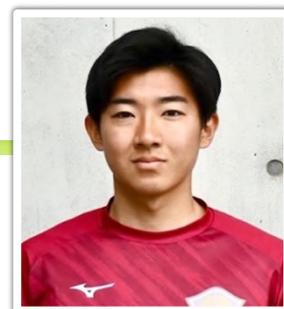
1-0で勝ち越した状況で迎えた試合終盤。私は何としてでも勝ち点を掴みたいという気持ちでいっぱいでした。負けが続いていた中で、この試合こそ勝ち点を取るチャンスだと感じ、ピッチの中も外も誰もが全力を尽くして臨んでいたと思います。その瞬間に聞こえた歓声は、何ものにも代えがたい貴重なものであり、その感覚は今でも私の心に鮮明に残っています。この時のような関わる人すべてが熱狂し、没頭する感覚を私はこれからの社会人生活でも味わいたいと心から思います。あの時感じた、勝利に向かって一心に駆け抜ける力強さ、そしてその先にある達成感。そんな瞬間をこれからの人生でも経験できるように、一步一步を踏みしめながら歩んでいきたいと強く思っています。

7月6日 第13節 vs 東京学芸大学 △ 1-1



## 🏆 葛藤の「むぎきり」

西田 優希 (4年 MF) 東京・南多摩中等教育学校



始めに4年間多大なるご支援・ご声援をいただいたOBOG・保護者の方々に心より感謝申し上げます。私の視点からその力を実感できたのは遅まきながら公式に出場するようになった今年度からでしたが、それ以降は、それまで以上に責任感を感じさせていただき、日々のトレーニングに一層身が入ったことを今でも鮮明に記憶しております。このような恵まれた環境を整備いただき本当にありがとうございました。



さて、私からは近年のア式蹴球部御用達のうどん屋「むぎきり」におけるメニュー選択の葛藤、というテーマでお話をさせていただければと思います。「むぎきり」が展開するメニューは幅広いですが、メインは3点で、「とり天うどん」、「肉うどん」、「とろろ温玉うどん」です。最も人気があるのは「とり天うどん」で、部員8人で行けば、6人は頼みます。それもそのはず、ジューシーで肉肉しい味わいが、練習後の疲れた体に刺さります。

1回の食事における満足度が、おいしさのみで形成されるのであれば「とり天うどん」の右に出るものは多くはないと言える自信はあります。しかし、ア式部員の食事における満足度は、おいしさだけで測れるほど単純ではありません。栄養バランスも加味されます。この点、「とり天うどん」は鶏肉が衣で丸々おかわれているわけですから、脂質過多で大幅減点です。



ここで、「とり天うどん」以外を頼むほうが満足度が高いのではないかという疑問が生まれ、その他のメニューが初めて脚光を浴びます。まずは、とり天に機能が近い「肉うどん」です。



ただ、この「肉うどん」には致命的な弱点があり、具が少ないのです。一般的な具とうどんの配合量で食していったとしても、元々のうどんの量を10としたときに最後の4は、うどんソロで食べなければなりません。この点で、おいしさの持続性という観点から見ると食後の満足感は減点されます。

そこで次に目につくのは、「とろろ温玉うどん」です。現役のア式部員の年齢が20歳前後であることを考えると少し質素なメニューに見えますが、そこそこのおいしさがあり、具の量も十分です。栄養素という観点では脂質が抑えられている反面、タンパク質が少ないという弱点がありますが、コンビニのプロテインジュースと組み合わせることで弱点補完が可能です。ただ、いかんせん質素です。



さて、時系列で見たときにメニュー選択はどのように変更していったのでしょうか？

個人的には「とり天うどん」→「肉うどん」→「とろろ温玉うどん」+ プロテインジュース → 「肉うどん/とり天うどん」のローテーション、という変化を遂げていたように思えます。

「とり天うどん」→「肉うどん」→「とろろ温玉うどん」の流れの理屈は上記で示した通りですので、ここでは最終的な結論が「肉うどん/とり天うどん」のローテーションとなった原因を示したいと思います。まず「とろろ温玉うどん」+ プロテインジュースの落選理由ですが、やはり質素すぎます。練習後の食事が、とろろと温玉では納得がいかず、栄養素では敵なしとわかっていても、持続可能な方法ではありませんでした。結論、ベースは「肉うどん」になりました。具の量が少なく後半戦はうどんソロという弱点があるものの、逆に言えばそこさえ乗り切れば、味・栄養素どちらの面で見ても満足度が高かったです。私に関して言えば、この「肉うどん」の唯一の弱点は、最初にソロうどん2を消化し、最後のソロうどんを2に減らすことで補い、満足感を高めていました。

しかし、ア式蹴球部たるもの、ストレスの大きい練習日もあります。

そんな時は「肉うどん」を工夫込みで食らえるほど余裕はありません。そんな時に、帰ってくるのが「とり天うどん」です。ジューシーで大きなとり天の癒し効果は抜群です。そして、ただただジャンクフードではないところが、とり天の何とも憎めないところ。3つの大きなとり天に加えて、お気持ち程度のしし唐とかぼちゃの天ぷらがついており、ビタミンを摂取できます。また鶏肉自体は低脂質でたんぱく質抜群なので栄養も問題なしです。脂質に関して、真相は定かではないものの「減らし過ぎるのはスポーツマンにとってむしろ良くない」という説も流布していたため、私はこの説を採用していると自分に言い聞かせることで「とり天うどん」の満足度を高めていました。こんなどうでも良い楽しみ方を経験できたのも、ア式蹴球部に携わっていただいた皆さんのおかげです。



齊藤泰治

塚本悟大

西田優希

同期と「そばきり」にて ジャンケンで負けた者が支払うルール



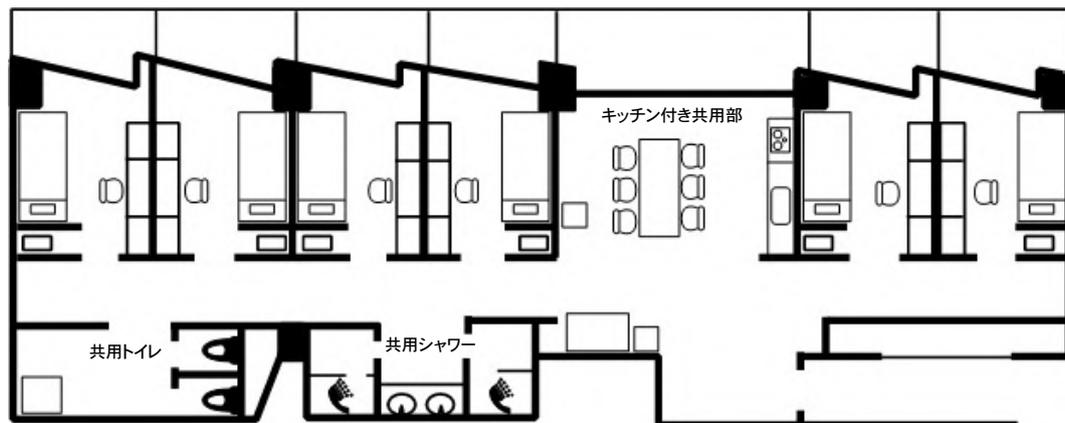
# 🏆 こだ寮

ほね こうし  
羽根 光至 (4年 DF) 栃木・宇都宮高

一橋に合格が決まった後、小平寮に入寮することになった。  
理由としては大学合格前に家探しをしていなかったし、栃木県宇都宮市でずっと生活してきた自分にとって東京の家賃は高いだろうと思っていたためだ。そんなこんなで「こだ寮」での生活が始まる。入寮することが決まったのはE棟だった。インターネットで「こだ寮」について調べていたら、「E棟は留学生も多く英語が公用語である English のE棟」なんて情報があって不安でいっぱいになった。宇都宮で英語を授業以外で使う機会なんてなかったし、まず英語を話す人を月に1回授業に来るALT (Assistant Language Teacher) 以外で見たことなんてなかった。



\*筆者の部屋は  
E棟の3階で  
キッチン付きの  
6室共用タイプ



入寮すると当時はコロナの影響もなく、社会学部の2年生2人と新入生の自分の3人の共同生活だった。ひとまず公用語が英語という情報はガセネタであり安心である。2人の先輩には大変お世話になった。同じ寮生だし上下関係もなく敬語ではなくタメ口の会話だったし、もはや家族みたいな関係だった。訳の分からぬ履修の組み方から周辺のスーパーの情報・料理の仕方まで多くを教えてもらった。

“大学の授業はテストで満点を目指したりなんかなくても  
授業に出席していれば取り敢えず単位は来る。ま、これが難しいんだけどね”

なんて授業が始まる前に言われていたが、まさにその通りであった。留学を志望していた2人は共用部で勉強する姿をよく見かけたし、そこに混ざって一緒に勉強したりした。

ルームメイト2人と



キッチン付き共用部



洗濯物を干した筆者の部屋



ある日の自炊した夕飯（サバの味噌煮と豆腐など）

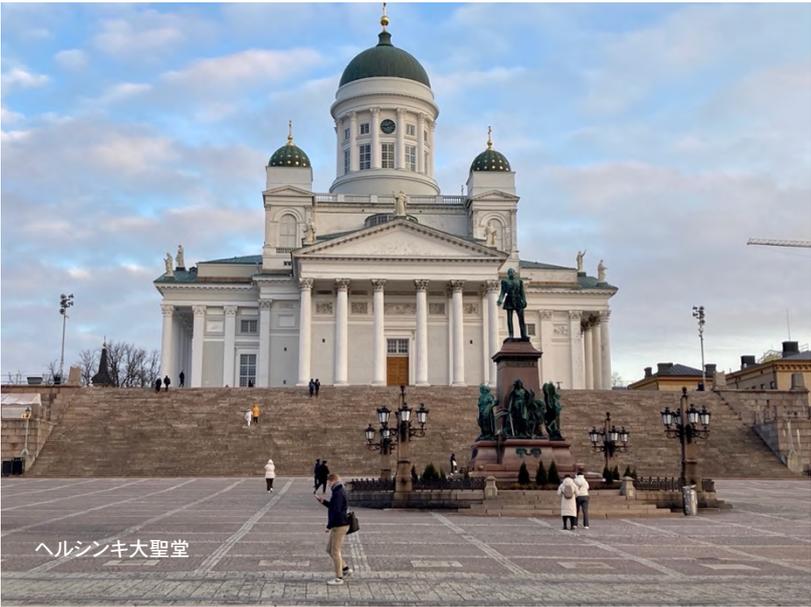
2年次には中国人とイタリア人の留学生が来た。すると2人の先輩が英語で不自由なく彼らと会話をしていることに驚いた。中国人の留学生に関しては日本語も不自由なく話せるし、思わず“何か国語話せるんですか？”と聞いた。高校までの5教科8科目で点数が取れるなんて大したことないなんて思う出来事だった。2年の後半からはB棟に移動してまた日本人の一橋の学生や各国の留学生と一緒に暮らすことになる。『龍が如く』が好きで歌舞伎町の飲み屋情報にやけに詳しいシンガポール人、日本に到着した2日後に富士山に登りに行ったフランス人、マーケティングを学びに一橋に留学してきてその後、母国で修士号を取ったら研究内容とは全く無関係のバリスタになりたいというベルギー人など、様々な人に出会った。留学生はみな大して日本について調べもせず、極東の日本の文化を知りたかったくらいの温度感で留学してきて、日本のことが好きになって帰国していった。どこか嬉しいばかりである。

筆者の部屋はB棟の1階で同じくキッチン付き6室共用タイプ



一方で、留学生に日本について質問されても分からないことが多く困った。“日本で行くべき観光地は？どんなアニメがおすすめ？”などと聞かれても回答に困る。たいていの場合、彼らが半年間の留学生生活を終えて母国に戻る頃には、多くの場所へ旅行に行った彼らの方が自分よりも日本について詳しくなっている。さて英語に関しては、留学生からこんな評価を得るようになった。“このあたりの日本人の中では一番英語が通じる”・・・ただ比較対象は、道端で話しかけたときに“*No English, sorry*”という日本人だから、そんなに誇れるほどではない。というか、自分も急に英語で話しかけられたら、緊張してそう答えるかもしれない。それでも留学生からエッセイの書き方を教えてもらったり、言語は数をこなすしかないというアドバイスをもらったりもした。多くの留学生は英語が第1言語ではないからこそ、うまく英語が話せない自分の気持ちを理解してくれたのか、みんな優しく接してくれた。困ったときは取り敢えず“*I don't know how to say in English, so take a moment.*”と言うとともに、スマホ片手に google 翻訳で伝えたい内容を英訳して相手に見せるという手段も得た。

部活を引退後の2025年2月にはスウェーデンとフィンランドにオーロラを見るために1人旅をした・・・天候不良でオーロラは見られなかった。初めての海外旅行だったため不安も大きかったが無事に帰国できた。上記の2か国は母国語が英語ではないものの、みんな英語を問題なく話すことが出来ていて非常に驚いた。自分は相手の言っていることの半分程度しか聞き取れず、英語力不足を痛感しつつハプニングばかりであったこともあり、言語力以上に精神力が求められると感じた。まず基本的にバスや電車の乗り方が分からない。フィンランドではバス停にそもそも時刻表が無かった・・・もしかしたらあったのかもしれないが雪で埋もれて見えなかった。



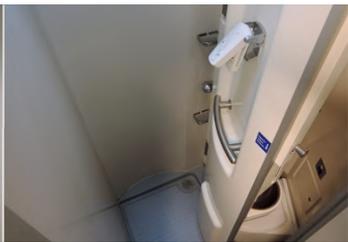
ヘルシンキ大聖堂



フィンランドのバス停



サンタクロース エクスプレス



寝台列車に乗った際には3枚あった部屋のカードキーの内1枚が別の部屋のもので見事に3分の1の確率でそのカードを引き当て手ぶらで外に出てしまい、1時間部屋から閉め出された。さらにホテルに向かって徒歩30分程度の雪道をgoogle mapを頼りに1人で歩いていたら、寒さの余りスマホの電源がいきなり切れるなんてこともあった。さすがに動揺はしたものの、それぞれ何とか乗り越えることが出来た。その背景にはこじつけかもしれないが、大学4年間の部活の経験もあったと思う。

1年次には個人として納得のいく結果を残せず、苦しみながらも自分なりに努力をして4年次には公式戦で活躍できた。しかし、この集大成の時期に膝の怪我をしてしまい、6月頃からサッカーがほとんどできなくなってしまったのだ。それでも、自分なりに下を向くことなく努力した。こうした困難を乗り越えたという達成感や、“あのときの挫折に比べたら大したことない”と思わせてくれる感覚が、ピンチのときに自分を支えてくれた。引退後にア式で4年間頑張ってたよかったなと改めて思わせてもらえた瞬間であった。



## ⚽ 非日常から見た日常

やぶた なおき  
**藪田 尚希** (4年 FW) 東京・麻布高



私はア式での最後の1年にオーストラリアへ留学をしました。この留学での体験と外から見たア式に対する印象について綴らせていただきたいと思います。一見すると関係がないように思える2つの話ですが、実はどちらも「自ら考え、行動すること」が求められる環境であり、多くの共通点があると感じました。

オーストラリアでの留学生活は、日本での大学生活とは大きく異なります。授業では教授が一方的に講義をするのではなく、学生同士のディスカッションが重視され、発言の機会が多くあります。意見を持ち、それを的確に伝えることが求められるため、受け身の姿勢では学びの機会を活かせません。最初は戸惑いましたが、積極的に参加することで次第に自分の考えを整理し端的かつ論理的に伝える力がつきました。また多文化社会であるオーストラリアでは、異なる価値観を持つ人々との交流が日常的にあります。知り合った現地の学生や他国の留学生と話す中で、考え方の違いを理解し、尊重することの大切さを改めて実感しました。ア式蹴球部の活動でもチーム内で意見がぶつかることはありますが、共通の目標に向かって協力することの重要性は、サッカーも留学生活も同じなのかもしれません。

オーストラリアでの生活が続く中で、

改めてア式蹴球部の特徴や価値を客観的に考える機会が増えました。特に感じるのは、ア式蹴球部が「選手主体の組織」であるということです。戦術や練習メニューの策定、チーム運営など、多くのことを自分たちで考え決定していくスタイルは、留学先の大学で求められた「主体性」とも通じるものがあり、改めてア式蹴球部の環境の特異性と、その中で培った経験の価値を実感しました。

留学を通じて、日本にいた頃は気づかなかった視点を持つことができました。

ア式蹴球部では、自分で考え、仲間と議論し、行動することが当たり前になっていましたが、それは決してどこにでもある環境ではありません。そして、それはオーストラリアでの大学生活においても、非常に重要なスキルであると感じました。サッカーでも留学でも、待っているだけでは何も始まりません。自分の意見を持ち、それを伝え、行動に移すことが成長への第一歩であると思います。最後になりますが平素より一橋ア式蹴球部を支えてくださる OB・OG の皆さまに、心より感謝申し上げます。

ありがとうございました。



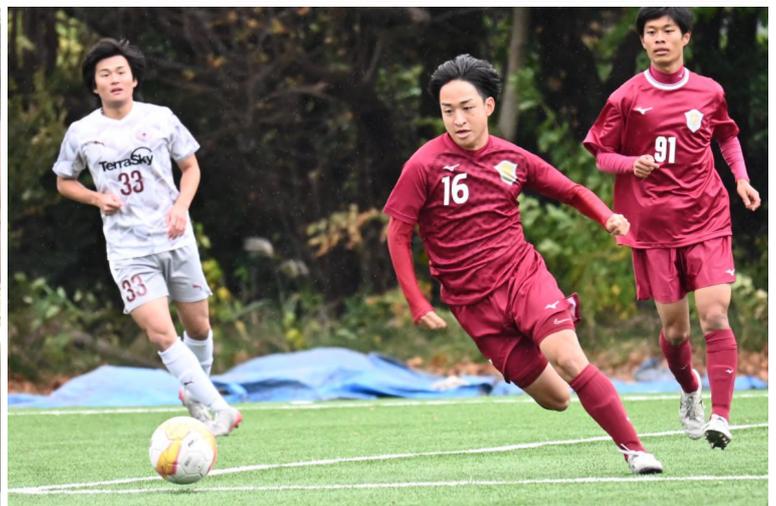
留学先パースの海岸



大学の友人たち



世界一幸せな動物 クオッカ



## 🏆 学年旅行

渡辺 志音<sup>しおん</sup>（4年FW） 東京・桜修館中等教育学校



卒業旅行として同期5人でヨーロッパ旅行に来ている。日本を発ってからイスタンブール、カッパドキア、ローマをめぐり、現在ヴェネツィアに到着して、この文章を書いている。大学生最後の卒業旅行もあつという間に折り返しに来てしまい、旅行を楽しむ一方で少し寂しくもある。学生最後の残りの旅行生活を精一杯楽しもうと思う。

\*トルコ・カッパドキア

\*イタリア・ローマ



\*イギリス・ロンドン ブライトン vs チェルシー戦

\*スペイン・バルセロナ

卒業旅行中ということもあり、自分はこの西松会新聞でア式のイベントの一つ？でもある学年旅行を振り返ろうと思う。毎年夏・冬の長期オフで行っていた学年旅行の中でも、2年夏の軽井沢旅行と4年夏の大島旅行は個人的に特に印象が強い。

### 軽井沢旅行 (2年夏オフ)

複数のグループに分かれて車で軽井沢に向かい、昼にBBQをした。

見晴らしの良い綺麗なBBQ場で、男だらけの集団は少し浮いてはいたものの、最高のBBQだった。BBQ後には近くの温泉に行きくつろいだ。シ式の学年旅行にしてはかなり密度の濃い旅程であり、この時点ですでに充実した学年旅行であった。そしてそのあとは、五十嵐の祖父母の別荘に宿泊した。ここでの宿泊が振り返ってみるととても思い出深いものである。終始お酒を飲んだりゲームをしたり、積もる話をしたり、とても楽しい時間だった。西田がポジション争いへ熱い意気込みをしていたことが鮮明に思い出される。2年から入部した西田は当初一個下のス式と仲良くしていることが多かったが、この旅行をきっかけにシ式と仲良くなったと個人的には思っている。楽しかった時間は束の間、翌日1人が体調を崩したと思ったら、続々と体調不良者が発生し見事にほぼ全員コロナに感染した。自分もそのうちの1人で、旅から帰宅するとともに2週間の隔離生活が始まった。結果として、貴重なオフのほとんどを自室で過ごすこととなってしまい、楽しみにしていたフェスも行けなくなってしまった。楽しかった思い出も苦い思い出も全てひっくるめて、印象深い学年旅行であった。



バーベキュー場にて



五十嵐家の別荘にて

狩野 渡辺 笠置 桑島

齊藤

### 大島旅行 (4年夏オフ)

4年夏の最後の学年旅行は大島。サ式が4年の学年旅行で式根島に行っているのを見て、漠然と島に行きたいとみんなが思っていたら、いつの間にか事前知識が全くない大島に決まっていた。自分自身も初めてでワクワクしながら臨んだ大島は、想定以上に過酷な旅行だった。

まず、真夏の炎天下の中で移動用の軽のレンタカーはエアコンが効かず、室内にいる時以外は常に汗だくの状態だった。さらに電子決済が普及していない大島において、島内に2つほどあるATMは17時ごろに閉まってしまうため手元に現金が無さすぎる事態が頻発した。大学4年間で最も困窮に陥ったのが、この大島旅行であると言っても過言ではない。当然、宿の宿泊費15万円も現金で支払うことを事前に知らせていたにも関わらず、現金を持って来なかった者が数名いたことで1日目から険悪な雰囲気が一瞬漂った。

そして、極め付けには1番楽しみにしていた海水浴が過酷すぎた。

島内にある海水浴場は、ビーチなどない岩場にあるフィンなどの装備を身につけたガチ勢のための海と、足ツボ並の痛すぎるビーチと、火山噴出物によって形成された灼熱の黒いビーチであった。黒いビーチは熱すぎておそらく足を火傷した。そんなこんなで思っていた以上に海には入らない大島生活であった。

それでも、1日目にはバギーで裏砂漠という場所に行ったり、2日目には島一周のサイクリングや三原山を一望する温泉に行ったり、男15人で綺麗すぎる夜空で流れ星を探したり、夜には飲みまくって騒いだり、3日目には数人で三原山のカルデラまで登ったりと、3日間で大島の全部を満喫できた気がしている。想像以上に過酷だったものの最高の学年旅行であった。



これ以外にもたくさんの学年旅行をしてきた。

計画を全然立てずに温泉だけ行ってほとんど飲んでた記憶しかない熱海旅行もあったし、就活に追われてお台場でサバゲーしてサイゼリア豪遊しただけの学年旅行もあった。幹事によって旅行の計画のクオリティには大きなバラつきがあったものの、ア式での4年間の学年旅行は全て最高に楽しかった。旅行はどこに行くかよりも誰と行くかが重要であるということを身をもって実感したし、どんな旅行でも楽しいと思えるようなシ式の一員で良かったと、今心から思う。

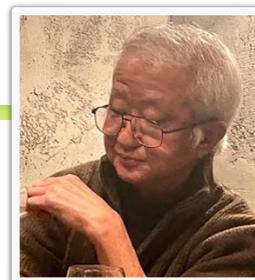
最後にはなりますが、日頃から現役の活動をご支援いただいている

OB・OGの皆様のおかげで、4年間一橋ア式蹴球部で充実したサッカー生活を送ることができました。本当にありがとうございました。今後は自身もOBの一員として現役の活動を支えていきたいと考えておりますので、引き続きよろしく願いいたします。



## 🏆 春は“温故知新、の季節

福本 浩（昭52卒）編集長



早いもので、私がWEB版の酉松会新聞の編集長になって12年になる。古希を過ぎ、原稿を集めるのも編纂するのも年々きつい作業になっているが、寄稿して下さった方々の文章に続けていく元気をいただいている。改めて感謝申し上げたい。

令6卒組は残念ながら「悪い子」になってしまったが、かなり結びつきの強いOBになってくれそうだ。これからの酉松会を支えて行って欲しい。でも、先は長い。気負う必要もない。ゆっくり、のんびり、未永く。

ところで、近年の小平でのOB戦と如水会館で行われるOBOG総会のことだが、この2つのイベントの間が5時間以上もあり、場所も遠く離れているので、両方参加するには不便だと思っているのは私だけだろうか。小平グラウンドでOB戦をやる意味は分かるのだが、以前の巢鴨にある三菱養和グラウンドでやっていた時の方が両方参加するのが楽だったし、集まりもよかった気がする。会費も安かったし（笑）。2つを分けてやってもいいのかなとも思う。幹事諸氏にはご検討願いたい。

話は変わり、先日、《百年史秘話》で取り上げた昭和17-18年の『予科練習日誌』の件で、石井 徹さん（昭30卒）にお会いした。読みづらい旧字体の文章を読んでいただくのが目的だったが、日誌を書いた大先輩たちの生前の姿をよく記憶されていて、いろいろ興味深い話も伺うことができた。印象的だったのは、戦時中も終戦直後の時代もグラウンド内では敬称省略で、上級生であっても「さん」付けせず、あだ名があればそれで呼び捨てにしていたそうだ。例えば高柳 晋さん（昭23卒）のあだ名は「はっば」。理由はかしわ餅を葉っぱごと食べたからだという（笑）戦時中の運動部というのは封建的・軍国主義的なイメージを持っていたが、意外に自由で闊達な雰囲気だったんだと認識を新たにした。私の現役時代も先輩後輩の堅苦しい関係は皆無で、それが母校サッカー一部の伝統だったんだと知ることができて嬉しかった。同記事にも記載した昭和26年復刊の『蹴球』の中で、新入生だった石井先輩がなかなかユーモラスに紹介されている。当時は旧制商大と新制一橋大の学生が混在している時代だった。

### 石井 徹 新制1年 RW 新宿高出身

顔はクレオパトラか楊貴妃か間違える程のものだけど、なかなかファイトを持って居る。新宿高校背にサッカーやってたそのために、背は伸びないが腰低くキックは大分当っている。吉沢キャプテン（弘泰 本3）無き跡はW型の右端に席をとらんと、座席券既に獲得はしてある模様。石井は同じ石井（弘志 新3）でも大風呂敷は持ち合わせない。



石井 徹



酉松会新聞を発行する春は、いつも私にとって“温故知新、の季節。読者諸兄も、そうであれば嬉しい。最後に、現役部員たちのサッカーと事業のさらなる発展を祈念して本稿を締めくくりたい。